

誰の灘

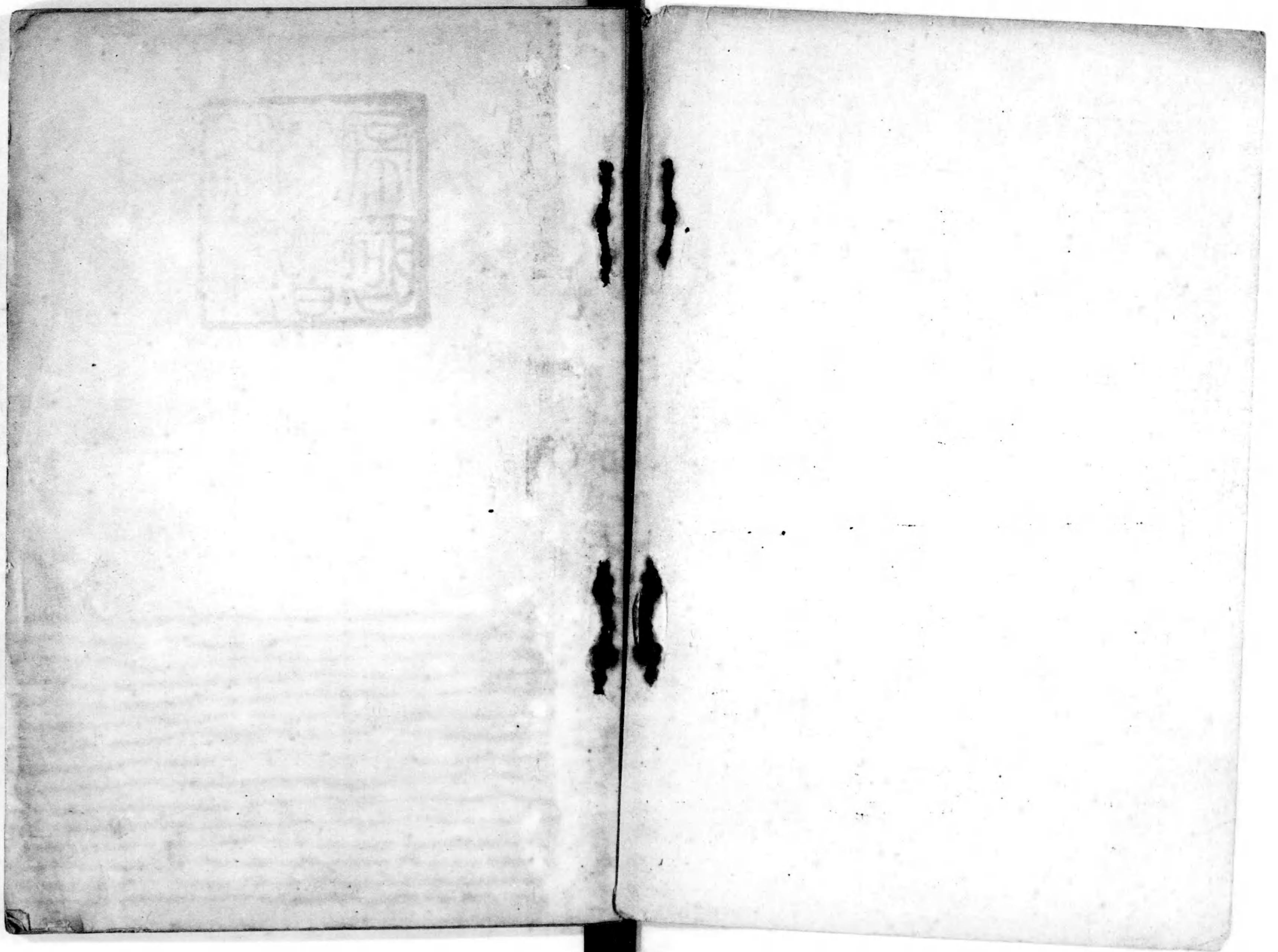
中山陽水著



0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





特103  
260



誰

の

罪

中

山

陽

水

大正  
4. 9. 11  
内交



小説 誰の罪 緒言

徳

徳なるものには、天地の命令によつて自然に備りたる徳、即ち天然に享くる徳と人爲に施す徳との、二つあるやうに思ふ。天然に享くる徳は萬物悉な之に浴するも、天然に享くる徳の外に施す徳は、人以外のものにはなる。人は萬物を支配する能力を有するが故に、又施す徳を創る能力も有して居る。人以外のものには道德とか公德とか云ふものはなる。然うして天然に享くる徳は、人間而已でなるのは例へば禽獸草木より云へば、今茲に三匹の猫が生れる、其中の一匹は下にも置かぬやうに愛せられ、三度々々の食事も其家人同様のもの若くばそれ以上のものを與へられ、常に膝の上に抱かれて、頭や身體を撫せられつゝ生涯を終り、次の一匹は捨てられ、飼はれて、時には頭の一つも烟管で殴られ、碌々食物も與へられず、又一匹は生れるなり捨てられて、野猫となり、盗み食ひしてでも生存を保たねばならぬものありとせば、是等は天然に享けたる徳の厚薄に

よると云はねばなるまゐ。草木でも其とうり、盆栽として愛せられ、又は庭園等に植へられて、鄭重にせられるのもあれば、捨てられるものもある、悉な人の支配を受けるのではあるが、其受ける間、良否あるは其ものと徳不徳と云つても、不思議ではあるまじと思ふ。自然に享くる徳は、人のみに限つたものゝ名ではあるまじと思ふ。萬物を支配するところの人には勿論其徳が人々によつて異つて居る、生涯大した艱難もなく、安樂に終る人と、其反對に苦勞のしづめで、之と云ふ娛樂もしたことなく終る人もある、所謂徳分であつて天然に享けたる徳不徳であらう。

然るに人は萬物を支配する能力があるが爲に、又人爲に施す徳も備へねばならぬ、人爲に施す徳なるものは萬物にのみではなぬ、人と人とに最大の必要がある、即ち道德とか公德とか陰徳とか云ふやうなものであるが、頃日其人爲に施す徳なるものが日を遂うて退歩して行くの感がある。人は此徳を忘れては萬物を支配するだけの人と云ふ價値がなくなる。然うして徳なるもの即ち人爲に施す徳は、公德でも陰徳でも好む、其施す徳の實現を希

望するのである。其實現には種々希ふものもあるも、曩きに施したきものは物質慾望の爲に之を無視して、不徳の行爲を敢てするを慎むことと、同胞の中、衣食足り充分余りあるものは、其衣食足らず、之を善良に充たさんが爲、其代償を需めんとするも、代償に換へる勞力に對する供給不足し、止を得ず衣食の途を失ひ、純良なる精神を殺して衣食せんとする、國家社會に一番恐しき者を補助すること、極言すれば大なるものは小なるものに對する、大ひなる融通であつて、物質精神の論なく、施す徳である。是は眞理上より人爲に施す徳であつて、最も今日の急務と願ふ。

一兩年前より襲ひ來りたる、古今稀なる大不景氣は、愈、日本固有の道德を破壊して、自然に進むか、物質的に進むか、精神的に進むかに、就ての迷ひは度を増して、事實に現はれて來た。本編は其施徳の必要を認め其對照を措き單行冊子として誰の罪の題下に社會に公にせんと欲し綴つたのである。

大正四年七月

著者 中山房治郎 識

ここごわり

本編はなるべく、わか分り易やすわやう、小説せうせつと講話こうわの間あいだをとつて、そこに心こころして書かきました、新講話しんこうわであります。

目次

- 一、高利貸岡村丈平の遊興
- 二、満由立吉零落後の陀住居
- 三、岡村丈平邸
- 四、今村熊藏邸
- 五、立吉一家の満悦と立吉の出立
- 六、立吉大阪にて稼かせぎ中途ちゆうと販國はんこく妻子しよしに面會
- 七、今村熊藏と山口初之進との激論

- 八、今村熊藏と熊本監獄に立吉が面會して後お瀧を留守宅に訪ふ

九、岡村邸の盗難

- 十、立吉再びお瀧に面會して五十圓を渡し販途山口初之進を罵り娘の金を拂ふ

十一、立吉歸宅と再び大阪に上る

十二、大村家の親族會議

十三、大村商會閉店と悲惨

高利貸岡村丈平の遊興

暑の々々と、人は渴して、氷を好み。禽獸、慕ふて、水邊に近みて水を、飲まんと欲し。草木、朝夕の冷氣を俟つて、水氣を吸はんとする、夏も、暑の々々土用の中。

藝妓三人と仲居一人を連れて、熊本市より一里余り隔ちたる。水泉寺境内の泉遊亭は十二疊の廣間に、紳士とも紳商とも分らぬ、四十才斗りの面構からして、狡獪らしむ、顔をした客がある。身には薩摩上布の帷衣を纏ひボタ／＼するやうな、白縮緬の兵兒帯を、背ろに垂らりと結び。皮蒲團の上如何にも横柄らしく安座をして、左の手には八字髭を捻り、右の手には、コップを持つて、二十七八位の中年増に、ビールを酌がせ、怪体な眼

元をシヨポ／＼させつゝ、男は

「コラ、三吉貴様も年の加減か、大分酒が弱くなつたな、人は年を老りたくないものだ。マア斯うして、君子と白代と三人並べると、儂は既う君子か百代の方に氣が移つて、其麼やら儂の心が二人の中、就れの方かに轉宅しそうだ。」と、

前に流れる、水昌の如く、透きとほつた水に魚は遊泳して居るのを、見ても涼しそうな水景を眺めてゐた。が、向きなほつて言ふと、三吉は此暑のいで身の置き所もなると、人が囁く、炎熱に、焼けて／＼嫉妬たほし、眞赤になつて、怒り出し、「旦那。否へ、岡村様、人を好む加減に、馬鹿にしなさんな。八年前の此三吉は、お前様に金を貸したものだ……」と云ひかける

岡村は「馬鹿、酔ばらうと、貴様は其で困るのだ。嘘を言ひかけるにも程がある。儂の外聞に關かはる。」と言つて、

三吉の顔に、眼で知らず様に云ふ。三吉は

「ハイ、悪かつたです。且那、中直りに、一杯、頂戴ね、妾や全く悪かつた。」と謝したので、

岡村は「今後、心得るが好む。」と言つて、

コップ、を盃洗に俯向け、コップと音させながら、

「サア、更めて、酌そう。」と

三吉に渡さんとする、三吉は「且那、水臭いすね、杯洗なんかで、」と忿きながら受ける。百代は、

「姉様、妾は酌致しませう。」と、ビール、の壺を取つて、波々一杯酌る

で、

更に自分の前にあつた、コップに少し残つてゐたのを飲み干し、盃洗で濯いで、岡村に差した。

仲居のお辰が、ビール、は終ひになつたので、手を叩くと、女中は、ビール、三本と、鉢に、氷を盛つたのを、丸の盆に載せて、持つて、来た。

岡村は「道が料亭の、女中、氷を適度に、持つて、来るところが、中々氣が利くて、居る。」と賞めるのか追従かわからんことを言ふと、三吉は「女中さんに、祝儀、をね、」と岡村の指を五本握るも、五十錢は與へず。二十錢、紙に包んで、其もさも吝そうに出した。仲居のお辰は

「且那、一つ御唄をね、神田祭りでも」と勧めると

「儂が、無粋だ。三吉は、克く儂の事は知つて居る。其よりも、三吉、貴様



を此秋に、目出度、廢めさすのたそこで、貴様どの間の戀は、又、別な味がある。何か此暑む時候に、暑苦しむ、季候、の唄を訊ゐても、猶ほ暑くなる、氣がするやうだ。涼しそな、唄、を一つ聞かせて呉れ、」お辰は「一層、涼むよりは氷も要らないくらゐの、寒ひときの、時候ものは」と言つて、アハ、つと、笑ゐながら

「三吉様、且那の御注文通り。別な、戀。六ヶしむ、やうだね、だが、其に似た、秋のものを」君子は

「姉様、何か一つね、」百代も

「姉様、是非、一つ」と八方から攻め立てられた、三吉は、最早、猶豫がしては居られず。お辰は、要らざる差し出口をするからと、考へながら、去りどて注文出されて、岡村は其處でも好むとしても、お辰始め、百代や君

子に對しても、此儘、唄はずにも居られんと、決心して、其なら、萩桔梗、でも弾きましやう。」と調子を合はして。フントン、シャン、と始めかけ、……「萩桔梗うを一中に玉章あ忍ばせて月は野末に草の露う君が松虫夜毎にすだく更け行く空や雁の聲戀は斯うしたものかゝるな……と三吉が、聲自慢の爽快なる聲、で抑揚自在に、乙と、甲と、の間を明かに別けて、腹の力で、自然に出した。其聲は涼しく出で、優しく畢つた。唯、見惚れ聞き惚れて居た、お辰を始めとして、皆の者一同に拍手した。

其からは、暑むも涼しむもなる。君子、百代、も共に料亭より三味線を借り、弾く、唄ふ、で騒ぎだし。岡村は、陰險な顔を頬冠り、腰を屈め、危なる足元を、ヒヨロ／＼、させて、頭を振り、両手を上たり下げたりして

躍るさまは、顔相や心の陰険のとは反對で、其無邪氣さ加減は愛らしむ。  
人は斯ふした、ものかゝるなど、言ひたくなる。勘定を濟ませ、  
泉遊亭を出て、熊本市へ皈つたのは、午後八時頃、であつた。  
熊本は唐人町日の丸旅館の、裏二階、八疊の間に商人風の男は、一生懸命  
に、帳面と算盤とを前に置いて、瀕りに、何か考へて居る。と、  
本家、奥二階へ藝妓一人を連れて、女中に案内されながら、入つて来た、  
男客がある。  
裏二階八疊の間と、本家奥二階、即ち今、客の男女二人が入つた間とは、  
四五間ばかりの庭園を中に狭んで、夏の明け放しにしてある。其座敷と、  
座敷との、互の人も物も見透けてゐる。  
本家奥二階に上つた女が、男を床の前に、已れは差向ひに座つて、團扇を

以て風を送りながら、庭の方ともなく、裏二階の方ともなく、又は床に懸  
けてある軸ともなく、額ともなく、眺め廻はして居る。  
女中は、茶を以て来て二人に進める。と、男は  
「ビール、を一本極冷やして、持つて来る。」女中は  
「御肴は、何に致しませう。」  
「然うだね、バナ、の極好むのと、夏蜜柑とを、」  
「承知、致しました。」稍々、あつて、女中が持つて来ると、  
「要があれば、又呼ぶ。」  
「御夕飯は、如何が致しませう。」  
「例の、通り。」  
「ハイ、承知、致しました。」客と、女中との、話の模様より推察すると、此

男女は、宿泊を名として、此處で相引するが爲め間々來るのであるらし  
る。女は、男に向ひ、

「貴公も、今は岡村丈平と云つて、金を貸して、返済期の遅延する者と利拂ひ  
の延びる者等だけになりと、頭を下げてさせて且那ぶりをして居るものゝ、…  
八年前に妾の家の、財産を横領して、父や、母を、体好く殺したやうな事  
をしたことは、よもや忘れはしませんでしやう。尤も、父母のは病死には  
違ひなわが、父母の心を殺したが、爲めの病死です。そうして見れば、人  
殺である。人の身體を殺さすとも人の心を殺したなら、自然、其身體の倒  
れるのがあたりまゐ。妾の爲には、貴公は敵！」

其上、妾の生娘で、世の辛酸も知らぬ初生なのに附込んで、甘々と誘  
拐し滿洲までも賣飛ばし、中々爾んなことには乗らん筈であつたが、悪

事にかけては、貴公の抜群の腕前、船に押込められた時の悔しさは、今に  
忘れは致しません。併し滿洲での、妾が借金を其後拂つて、呼んで呉れた  
だけは、少し貴公の罪滅ぼしとなつて居るものゝ。元々の財産以上にして  
戻し、妾を安樂にさすと、常々言つて居るのも、其も、大概嘘でしやう。」  
と、かき口説ひて居る三吉も物質を欲せんが爲めに、是、又、巳れの復讐  
といふ精神を殺して、一刃も、父母の爲めに報ひやうともせんのである。

岡村は、

「貴様なり、父母なりは、馬鹿だから仕方がある。僕は彼の時斯うして貴様  
の家の財産を保護して行つたならこそ、貴様だけでも生きて、滿洲見物も  
さしたし、又呼び戻して、儂の金で自賄藝妓として外の妓共等に、姉様、  
々々、と、持囃され、大威張で居られるのだ。然もなくば、番頭や手代の

悪者共に、甘く遠くに葬られて居る。」

「エー。余まり、妾を野暮に仕なさるな。番頭や、手代は、忠義者。其を押込めたことは、覺へて居るです。又、保護して、下さつたものなら、何の恨みもないです。保護を名として横領したのです。」

「マア、保護でも、横領でも可いだないか、山内家を、元の財産以上にして返へし、貴様を安樂にさせて相續人は儂の二男に生れた政忠を貴様の子として、此秋、萬事目出度濟まそうと思つて、居るのだから、然う、やきく、言ふものでなぬ。」と云つて居る。所へ、女中は膳を運んだ。

岡村は、三吉に、戀の爲に斯うして居るのでもなく。又、三吉も、戀と云ふやうな念は毛頭なぬ。

岡村は、多少、精神の苛責より滿洲から体好く呼び戻し、得意の惡棘なる

手腕を振つて。三吉を、義理責めに僅かな金を與へ葬り去らんと、巧みに繰縦り、三吉は、元の財産以上にして返へすと言ふのを樂として、二人の關係は斯うして、結ばれて居る。強ゐ、惡ゐ、物質の奴隸となつた男と、弱い、心が、物質の奴隸となつて居る、女との對照は、好一對である。裏二階の客は、大牟田町の商人、満由玄吉と云つて、儒者の家に生る。父は、皇室の衰微を嘆き、維新の際には、勤王の大義を唱へて、東奔、西走、大に盡すところがあつた。

其、血統に生れ、其教を守る彼には、

今日の如き激烈なる、競争場裡に立つ人類社會。

優勝、劣敗、は動物界の普通であるから仕方がない。ないが、殊に生存の爲めには薄情に少々、不正當でも、自利と決した時には、施徳を棄てて耻

とせず。

不徳、不節操、は天下免許と言ふ風に行るものと殖へる、時代には損が多い。

懸金を延ばされても、事情を聞けば、却て、其に同情して是を俟つ、俟つて居る間には、其者の倒産から損をする。商品の如きでも、如何程、利益あるも、得意先、の不爲と思ひ、自分の意志に反した場合には、其事を明かして賣るから、自然已れから價を廉にする、嫌いがある。

併れども、是は正反對に信用を博し、益商業を擴張して、居る。が、曩きに言たやうなとうりの現今では、一つ奇禍を覗はれ、不幸に傾いたときには、斯ふ云ふ人間に限つて、再び立ち難ひ。

生存競争は、人智の洗濯であつて、垢も取れるが染色の剥げるのも、免か

れん。人智は進んで、何事も巧みに行る。代りに仁義道德と云ふやうなもの、退歩して行くのでも分る。垢は、充分落したいが、染色は、可成、保たしめたいものである。

今日も、金を取りに諸々を廻つて飯り、湯に入つて汗を流し、今、全部集金の出来た家と、入金の家との勘定をして。

ホッ、ト

一息して、廻り残りの家を明日廻るに就て、考へて居たところである。村落を曩きに廻らうか、市街にしようかと、何か其に就ての、得失があるらしく考へて、居たのであつた。

此家の主人は、頭を、玄吉の前に下げて、「毎度、御愛顧、に預り、又、只今は女中なり、私方迄、御心附に相成誠に難有、存ます。明日は、村の方

を御廻りになるですか、又は市街の方ですか、若し村の方ですと、早朝、御支度を致さねばならないです。が」

「サー、其處です。私も、どちらにしやうかと考へて居つた。が明日は、市街の残りを廻ることに決めたです。其からは、一寸、御預り下され。」と四百圓渡す。是を請取たる主人は

「是で、都合昨日の三百五十圓とで、七百五十圓御預りする。ことなるですね。」

「然様、其通りです。」主人が此金を預つて下りると、夕食の膳が出る、女中のお民は両手をついて、

「只今は、難有、毎度御心附に預りまして、」と禮を述べると、

「何、いつも僅かだね、」

普通、宿屋の茶代とか、女中に遣る。心附など云ふものは出立の際にするのは多いが、立吉は必ず、二日目の晩までに、渡すのは例であつた。然うして、村方の、商家の懸金集に歩く時は、早朝に旅宿を立ち、徒歩で行くのは例である。だから、宿の亭主は、翌日の都合を、氣を利かして尋ねたのであつた。

### 満由立吉、零落後の陀住居。

何れの市街にも、場末には、世を果敢なく暮す。惨な、貧乏人の集つた、所があるもので、大牟田町にも、然んな者ばかり棲じ、巢窟でも言ふのがあつた。其、職業とする重なるものは、日雇、俵夫、行商人、中には、按摩、羅宇の仕かへもあつて、朝の五時頃から起きて、食事を済まし其か

ら終日稼いで、二三十銭から、五六十銭位儲けて、稼ぎ疲て飯れば、貳参  
銭の菜にする物、米、一升、中には、酒の五銭も買つて、是を外になき  
樂どももし、之を、一家團樂の生活として、外には何の希望も、思ひもな  
い。否な、在つても、其、日、々々、の、生活に追はれて、出來んのであ  
る。社會には、朝から晩まで、晩から寝るまで、種々の、驕奢遊逸に身を  
持ち崩し、其でも、まだ、飽き足らず、妙な、擬模事をして、他人に嘲笑  
られ、好い事に思つて居る人もある、人の、一生程、種々なものがない。  
が、却て、是等貧乏人には、律義者が多い。心の美しい者が多い。是等、  
階級にある人類は、斯うして生活を續けて居たが、儘にならぬは浮世の慣  
へ、

天變地異は、勿論、國家の盛衰、社會の浮沈、森羅萬象、變轉異動は常

にして、間斷なく、蓋し、止を得ざるものあらう。  
然るに、世の不景氣と云ふ事も、人爲に防ぐことのできないものか、否や  
は別つとして、免に角、大正貳年下半期頃よりの大不景氣は、是等、人類  
を苦めて居る。

家と唱へば、家に違ひないが、表口は、何處やら、裏口は、何れやら、見  
分のつかぬ家がある。公道より其家を見ると、汚い、壊れかけた障子に反  
古を張つてあつたが、其も破れて、障子の骨を現はしてゐる。其棧も、所  
々、折れている。椽の上には、破れた、汚れた、衣物を着た。七八才の  
女の兒が、四つと、六つ位の、男の兒の守をしながら、遊んで居る、是を  
見ただけでも、愁傷い氣が浮ぶであらう。初めて行つた人が此處は此家の、  
案内口か案内口にしては少し變だが、併し、此處かとも、一向、判斷のつけ

様がなく、迷ふであらう。何にしても、憐れな日居と云ふだけは、忽ち胸を刺戟する。併し、此處は、表の入口ではなく、少し北に行くこと五六歩、表の入口らしいのは、満山玄吉と、記載した標札が紙にして、其、入口の柱に貼つてあるので分る。其東手、壁の前に、雨溜りとなつてゐるのは洗流臺で、軒が短いので、雨は降ると始終雨に打たれてゐる、洗流臺は斯ふ云ふ風だから、雨の降る日に、勝手元をする女の動作は察しられる。洗流の、界限には、さほど、雨を厭はぬ、古草鞋や、古細が、積んである、此、古草鞋や、古細、は、今年十二になる、總領に生れた、玄太郎、は毎日、拾ひに行つては、毎晩、寝るまで、須佐、に切つて、左官屋へ、買つてもらひに行材料である。此、須佐、も、此頃の不景氣で、賣れず。自然載積なしてゐるのであつた。洗流臺には、欠けた、椀やら模様が剝たのか

又素質かも分らん、色の茶椀が、此家の、主人の心も知らず、唯、譯もなく、轉んだり、春繼したりしている。入口を、南向ひて、入ると、土で、我手細工造にした、竈がある。釜は据へてあるが、釜の輪が、六分通り欠けて、若し据へ様でも損かつたら、其、間から、火を噴き出しそうなる危険さ。半疊ばかりの、表、入口の庭は、其竈や、費ひ残りの薪やで主人が毎日稼ぎに出る、最も、此家には、貴重品とも云ふ寶、即ち、食繼をするに、欠くことの出来ぬ。仕事道具で、狭ひ庭を塞いでゐる。座敷は、四疊半、一間。其昇口の、火鉢に、年は三十五六ぐらゐる。顔は青さめて、幾日も湯に入らるので、手や頤筋は黧んで、髪を乱し、瘦せこけて、窶れた身體を凭らせて何か心配らしく、生れてから未だ間もない、女の兒に、乳房含ませながら、太息ついて居る。



時間じかんは午後ごごの五時頃ごじごらう。是これは、此家このやの主人あるじであつて、汚きたない、弱よはつて、糸いとが曳ひけ、縮しま目が明瞭はつきりとせん、袷あはせを着まて。如何いかにも心配しんぱいあるらしく、少すこし俯向うつむいて、勢せいのなさそうな顔かまに、血ちの色いろがない、今いま、表口おもぐちまで歸かつて、極きまり、悪わるそうに黒眼勝くろめがちの眼めで、密そつと、内うちを覗のぞき。女房にようぼうは火鉢ひばちに凭もたれて、居ゐるのを見みて、直すぐ入はいつた。

立たちは、火鉢ひばちの横よこに安座あんざして、

「お安やす、困こまつた。山口やまぐち様に、段々だんぐん、事情じじやうを打明うちあけて、頼たのんで見みたけれど、中々なか／＼、聞きいては呉くれん。終しまには、「這こんな、甲斐性かひしやう、のない奴やつもない。儂おれのところへ、來くることはならぬ。」と、人ひとを余あまり、莫迦ばかにする。悔くやしいけれども、仕方しかたがない。今いまが、跡あとの祭まつりで何なんにもならんが、お前まへは、うす／＼と聞きいてゐるらしい、宅うちの倒産とうさんは、儂おれの不徳ふとく、誰たれに恨うらみがないと云いふものゝ、彼あの

者ものの悪計わるだくみにもあつた、と今日けふも聞きいた。訊きかねば訊きかん分ぶん、訊きけば腹はらが立たつ。其それは然そうと、此上このうへは仕様しやうがない。其その麼やなつと、流車賃きしやちんだけ工面くめんして、熊本くまもとへ行いつて事分ことわけて、頼たのめば、間逆まがさか、訊きかんとは言いつてくれまい、岡村おかむらの旦那だんなに頼たのんで、借かるの外ほかがない。とは言いふものゝ、其その麼やして、流車賃きしやちんを拵こしらへやうか知しらん。僅わずかなものであるが、其それからして困こまる。困こまつたことだ。」と忿ぼやきながら、悔くやんで、

急きゆうに、ボン、と、膝ひざを叩たたいて。

「又また、其その麼やとか今夜こんやの中うちにする。人ひとは一心しんとなれば、歩あるいていも行ゆけないことがない。若もし、流車賃きしやちんが出來でないときは、二三日にちの間あいだのお前等まへらが、食くふだけの物ものを拵こしらへて、置おけば可いい。斯かう、思おもへば別べつに心配しんぱいが要いらぬ。」と言いつて、居ゐるのはお安やすの心こころを慰なぐさめんが爲ためであつて、食くふだけのこと、言いふの

からしてどうするにも、今、忽ち策がないのである。お安は、熟々と其顔を眺めて、今の、夫の話も、まんざら、無根でない噂、山口と聞くさへ腹が立つ。五十圓の金は、夫病氣の際に止を得ず、娘を奉公に出して、給金を前借した。其時は、爾んな噂も、訊かなんだ。彼んな情を知らぬ、人とも思はなかつた。奉公させて、仕まつてから、彼んな、人間と知つたのであつて、夫が、山口と云ふだけ知つて、其外知らん。今言つた其噂さへ、知らぬが道理。殊に娘が初之進にと燃ゆるが如き、心を押さへて。這んな事でも、若しや、耳に入つたならば、平生、物堅、ゐ、夫、の、氣象。ア、其塵したらよからうか、と、口には、出せぬ。胸の中、噫悔る。情なる。世は世であつたなら奉公とは云へ事による五十圓の金に詰つた。ばつかりに給金を前借し其前借に附け込

今は十六娘の盛り花に例へば未開の花綻びかけの仇櫻迂奴惚れかは知らざれど他人にも言はれりや、自身にも美る娘と思ふ。親心其を無徒々々弄ばれ、其でも一言やう云はぬ。泣いて寝入ると云ふ様ななんぼ宅の人は善むとは云へ一言ぐらゐは報ひもしやうが是を訊かせん胸のせつなさ。何の因果か、應報か、無る袖振れぬ悲しさと共に耐へる此胸一つ強慾非道の人非人已れが金を蓄める外義理もなければ情もなる。爾んな者に、事を打明けて、頼みだけでも恩に着せて娘、かかづを苦める、噫、残念な、口惜る。一寸、一口、言ひ置けば好かつた。のに手抜かつたかと男優りの女だけに、悲憤は募るのと、平生よりの憂鬱とは、一時に、交々胸裡と云はず、腦裡と云はず、貫き來つたかと思ふ、瞬間、に、

アツ、と

思つたかと、思ふ、間の隙も與へず。産後未だ間もなきことゝて頭へピンと來ると同時に、終に逆上て積氣を起し、

「ア、苦しむ々々」

と一言二言叫んだと、思ふや否や、

手足を延ばし眼を見張り、

ウ、ンと、唸つたまゝ其場に倒れた。

玄吉は驚ゐて、

「お安緊乎せへ氣を確かにして呉れ」

と、耳に口當て言ふと雖。

お安は眼を開いたまゝ、齒を噛みしめて、全身が恰ど棒の様になつてゐる。

玄吉は背ろから抱き起し漸く腰だけ曲げさせて、抱ゐて居るのに、折々其曲られてゐる腰を延ばさんとして、

正氣を失ふた全身の力で、身體を直ぐにせんと、足のおごしと腰とに力を入れて両手を握りつめ、時々さも苦しそりに唸るのである。

が、腰を延ばさせてはならん。と、力一ぱる抱き締めながら、

誰ぞ來て呉れたら好む、玄太郎は飯つて來れば可むが、お末は今まで居たのに何處へ行つたのか、今日此場合、赤坊一人。水一抔汲ませに行るものがある。噫、其麼したらよからうか、幸ひ赤兒が克く寢て居るだけは優し若し思きて泣きかけでもしたら、猶ほどうもならぬ。早う、治まつて呉れば好む、治まつて呉れば好む。治まつて呉れたら好むが、今此手を離せば病を段々重らす様なもの、去りとして水一抔飲まさず癒くなる筈がな

ゐ、

と、身體一つで唯心の憔悴ばかりであつた。

然うして居る中に、玄太郎が飯つて來たので大に悦び、

玄太郎は未だ家へ入るまでに、ちらと其姿を見て、

「母様癩氣だ。早よう水持つて來て呉れ。薬は既うなるのか知らん。其鳴居

に釣つてある、袋を下ろして見て呉れ」

と、言ふのを聞いて

玄太郎も愕めた。

貧乏世帯に苦められ、心は普通より長せては居るが、何を云つても十二才

の少年、水を汲んできた茶碗の水を、お安は齒を噛みしめて居る口開けて

飲まさんとするも力も足らねば、巧しやもなる。玄吉は齒痒がつて、玄太

郎を心にもなき叱り言、

玄太郎は

泣かんばかりに、一生懸命となつて、漸う

お安の口を開け、水を流し込んだ。が、八分通りは込み返へず、又代りの

水を汲んで、顔に吹いたり口に流しこんだりする、毎に、

苦しき息を吹いて、唯唸るのみ、玄太郎は、

「母様しつかりしてお呉れ、俺は玄太郎、早よう心を確かにしてお呉れ。」と

小兒心に泣いて物言ふ、

其いどけなさ。薬と云ふも何時ぞや買った、其残りか散薬二服。其一服を

水に浮せて無理遣理に飲ませて。然う斯うして居る間に、多少正氣に服し

かけたものか、

「嗚呼口惜の。」と、只一口言ふと、玄吉玄太郎は喜んで、

「心を確かに、緊乎せむ。緊乎して呉れ、玄吉だ。」

「母様、俺は玄太郎、其麼孑しつかりして呉れ。」と、言ふて居る折柄お末は弟を連れて飯つて来る。

其風装は、其麼見ても乞食の子とよりは見られん、お末は八才、弟は六才と四才三人は此有様を見て、

「父様、兄様。母様は其麼したの。」と、お末は泣く、弟はまだ何は何やら判然解らぬのに、

「母様物言はん。俺はもう腕白はしやせん、勘忍して。」と、小兒心に悲さを知つて泣くばかりである。

お安は漸く正氣に復し、

「妾や夢の様であつた、何も知らなんだ。色々御世話を掛けましたね。」

と、細る微かな、憐な聲で言つて居る。

玄吉はお安の正氣に復したのを喜んだ。何分産後問もなく、肥立を心配して居た折柄であるから、

「お安、静かにりつと寝て、此儘心を落附けるがよむ。幸ひ、お前が癪氣を起した時、玄太郎が飯たので、俺は何程氣が確かであつたかわからん。手を離せばわるゐし、水を彼れが哺ませたときの嬉しさ」と、言るながら座敷の隅に積んであつた、蒲團と言つても煎餅見た様な、薄る破れた汚れたのを敷きつゝ寝させ、

「既う何も心配するには及ばん。心配したところ下何んにもならん。俺は明日、岡村へ行つて頼めば其麼ともなる、其は然うと氣分が其麼か。」

「もう大丈夫だよ」

「其なら一寸、夕飯の準備をしやう。」と、庭の竈の傍らにあつた、晝のお粥の残りを暖め、子供等と共に、其を今晚の夕食として、お安に、其お粥を

「食べるか。」と、言ふたら

「妾は今が宜しむ、夫れよりは、お前様なり小兒なり分けようて食べておくれ。」と、云ふ、

胸の中には、既う病のことは忘れ、明日は其麼しやうかど云ふ心配である。玄吉それを察し、小兒等に食事をさせておゐて、自分は枕元で慰め話をし居たら

お安はうつ／＼眠りかけたので其を見て火鉢の側に座ると玄太郎は赤兒を

抱き、妹や弟を連れてお安が病氣、小兒が居ては騒しむと察してか、遊びがてら子守かてらに出たのであつた。

あとに玄吉は、お安の眼を塞ひで居るのを幸ひに、火鉢に凭れてゐたが、火鉢の灰の上に、涙をポロリと雫しつゝ……玄太郎の出て行く姿を見送つて、

今は恰ど在校兒童の春季修學旅行期、十二に入つと云へば、唯嬉しそうに頭是なく教師に指導かれて、喜び走る頃である。其に月謝は無費にして貰ひても、學用品と、古着にても足る衣類を調へるだけの余裕なく、路傍に捨てられてある古繩古草鞋を拾はせて、須佐切をさせ、學校に行きたがるのを涙を呑んで抑へる、此悲さ。

然うして見ると、物が欲しむ、欲しむが欲しくても、正道を破つてまでは

其麼しても自分は物を得やうと思はん。思はんが其では食へん。

爾んな心は皆殺そう、此頃体の善る心の悪る、唯國法さへ免かるれば可いと、色々の工夫をして、食つて通る人が殖るが、律義で世を徹したるとばかり考へて居た分では、終には乞食、乞食が嫌なら、誠實と云ふ大切な人の道を欠ゐて通るより外がなる、なるが、誠實には正當と云ふ事が伴ふて來る、噫嫌だ、其麼考へても嫌だ。

嫌だが正當を去るか、乞食を去るか、の二つに一つを去つて、一つを探るより、外に途がなる。とは言ふものゝ、渴しても盜泉の水を吞まずとは、古人の戒め、飯令土食つても、悪る事は仕たくな。無るが。自分一人なら、土食つても此心を貫徹も、

家族皆とは云ふてもできぬこと。殊に何の嚙み分けもなる、頑是のなる子

供等まで、爾んなことができるものでなる。

兎も角岡村の旦那に頼んで、一時の融通をして貰をふ、間逆其は不可能とは言つては呉れまゐ。

不可能と断る様なことがなるとは信じてゐるが、忽ち困るのは、行くだけの瀛車賃である。瀛車賃さへできてあつたら、彼んな強慾一方で情を知らん山口に、頼みはせん、十のものなら八つまでは駄目と知りつく、耻を晒らしに行つたと云ふのも、瀛車賃に事欠るたばつかりであつた。

其麼して拵へ様か知らん其麼したら好むかと、考へて居るところへ、お安は、

「氣の毒だが水一杯頼むよ。」と、眼を開ゐて  
玄白の顔を眺めながら言つたので、

「其麼だへ氣分が、先程からすやく能く眠つて居たから、マア、是なら好むわと少し安心して居たのだが。」

「もう宜しむです。」

「宜むと云つても、まだ産後間もなむこと、何と言つても血が若むから儂も一時は心配した。」と、話合ひつゝ、お安は玄吉が茶碗に汲んで澆す水飲み終り

「妾はもう緊乎しましたから心配せぬやうにしてお呉れ。」と、言ひて又眼を塞じた。

其中に玄太郎は妹のお末や弟等と共に歸つて來て皆寢たのである。

皆寢たが寢ても眠られんのは玄吉であつて

玄吉は明日は其麼しても熊本へ行つて岡村に頼むと決心して居るも汽車賃

のできる途がなる困つたことだ。自分の行く様な先に錢の二圓も三圓も遊ばせて、ホイ好しと貸して融通するだけの家があらう筈もなる、去りて此儘には無論して居られん、意氣地のなるやうだが是も仕方がなる。

元の身分には迎もなれんところで、せめては眞心を徹して正當に渡世をしたるもの、是れでも三四年前までは世界の人に信用も受け手廣う商賣もして居たもの不自由なしに生活して居たもの。彼の時一つの失敗から惡ひ時には惡ひもの、失敗續りて國稅の不納より折の惡むのは信用受けて居る取引先の人の來て居て、こちらでは冷々して居るのにも假措なく、ベタ／＼差押へられた。其からと云ふものは全く大切なる取引先の信用を損ひ、終には家屋財産も棒にせねばならぬことゝなつた。

納稅は國民の義務、自分が其を遅延したのは、無論惡かつたが、其れが爲



めに苦心して、今四五日中に調金ができると云ふおりに、其理由を述べても訊かぬ。

かの地方官憲の統一は行はれて居らんなんだのは、獨り稅務のみでなるが彼の時の稅務官吏の小面が悪かつた。

「私と私との取引の支拂金は、彼處まで慘ふは行らんもの、又時と場合を見斗ひ、随分待つても呉れるもの、税金ばかりは猶豫がなる、其がしかたなるとしたところで、爾んな事をして税金を取つて、其上商人の商行為に要らざる事まで、干渉することもある、世の中は矛盾の多ひものではあるが、矛盾の甚しひのにも程がある。

併し、是も政府獨りで作つた、法律規則でするのでなし、我々國民が作つたもの、我々國民の代表者と共に作つたもの。然うして見れば個人には

政府に對して、何の恨みもなる筈である。隨て稅務官吏は憎ひのでもなると思ひ返した事もあつた。

其代り、其代表者を選ぶ時には、其代表者の人と爲りを、能く調べねばならん、克く下情に通じ國民の爲めには、其職を捨てるまでも盡すと云ふくらの志操の堅固な、敏腕家を選まねばならんと思ふて居たが、自分には爾んな事今思つて見たところで仕方がなる、其を選むだけの資格がなるやうになつた。

あゝ、赤貧者ほど辛ひものはなる。悲ひものがなる。ないが、其赤貧と縁が断れん、断れんどころではなる、斯う稼が無くては食ふことさへ出来ぬ、我々食ふことさへに困る人間が、爾んなことを思つたところ何にもならん。

と、這んなことまで眠られんほど、色々と思ひが浮んで来る。然うして、又、心に浮んで来るのは、

矢張心を鬼にせねば今の世は通れんのか知れん。昔、孔子や孟子の聖人が説かれた如な、其麼すれば人倫の眞理に悖るとか、斯うすれば人道の常識に逸れるとか、然んなことを言つて居たら、食はずに死んで終はねばならん。

生きやうと思ふたら爾んな心は悉な殺さねばならん。そんな心を殺しても身體が生きたがる今の世、昔の人は身體を殺しても、心を殺さぬ人を尙んだもの、今日の人の中には善い心を殺ししたことでも、物さへ拵へて身體さへ残つて居れば、懲役に行つたものでも、物がある爲め、却て人は其に追従することもある。

何が風教か、況して分らぬ様に巧みに、甘く行つて脱け、物を貯めたら何んな事して物を貯めても、偉ひやうに思ふ人もある。何が偉ひのか知らんだが、然うして行く方勝利かも知らん。自分のやうな考へを、古る思想と云つて、睨けられるのか知らん、否や、生存競争の死にも狂みからだ、と言ふた人があつた。だが、善る魂を殺してまで、物を貯めたがるのは、文明思想と云ふのであらうか、此思想は世界的に進歩もし、又發展もするのであらうか、其麼なるのか知らん。

自分の父は儒者であつた。儒は今腐儒と云つて、世には今日容れられん容れられんが、仕方はない、父が書き遺した、數々の教へは其麼しても、未だ頭を去らん、此去らんのは却つて身の譬となつてゐる。可しく、明日からは考へを變へて、地球は變轉して青雲を起し、冷却し

たる月に熱氣を加へ、一つの世界となつて、人の身體には翼が出来、地球と月の世界との、往復を使ならしめ、天地人合して、人は食はずに生き、寒暑の氣候を平均して、中和を保ち、衣類の要は更になく、人の魂を生かすとか殺すとか、爾んな面倒のない世にしやうと、非常なる發明心を感じた、是なら愉快、嗚呼愉快々々、欣喜々々、と流車賃位に馬鹿らしい、何を心配していたのか、人と言ふものは淺ましいもの、自分は神となつた

と  
思つた頃は、夢であつた。

覺めて見ると障子が明くなつて、雀は、其家の前にある柿の木に、十羽も二十羽も止まつて、喧しい程囀つて居る。

目が醒めてよく見ると、自分の身體が汗みづくになつて、襦袢が濡れ薄ひ

蒲團まで汗は徹つていて、冷たいが、着換へるにも代りがない。其汗だらけになつた、襦袢の上から、寒中より打通しに着て居る袴を着て、お安に「今日は、其麼だ。」

「今から起きて朝飯を拵へやうかと、思つて居るです。」

「飯令、氣分がよからうとも、今朝は長寢をして居るが好い、無理してはならん。」と、抑へる如に言ふたから、お安も其儘寢所を離れず、玄吉は家門に出て見ると、

春の朝日は半分ほど東の山の上を、眞赤に光輝を放つて現はれている、心の裡に痛みのある彼にも心は生き／＼して、一勢に、身體中の血が血管から血管を傳ふて、顔色に美を添へた、心の勇氣も呼び起された、昨夜色々思ひ煩つた末、夢見たことも、悉く忘れて終つて、一時氣は暢んびり

としたやうに感じた。

手洗も済まして家に入れば、

玄太郎初め子供等は皆起て、思ひ／＼に、汚い肩や尻の方の破れかけた、裕やら單衣やら分らぬ様な衣類を着て居る。

玄吉は米を研いて、竈に火を焚き、お粥を炊く傍ら、残つてあつた一服の薬を、玄太郎に言ひ附けて、お安に飲まして居る所へ、

一軒隔つて、隣の奥助と云ふ者の妻お兼と云ふのは、甲斐々々しく、臺所の仕まることでもして終て来たものか、前垂で手を拭き／＼、入つて来て。

「お早う、サア赤坊に乳を飲ませよう。昨夜一寸、玄太郎様が来た時間ひたのだが、瘰癧だつたとね、直ぐ訪ねに来うと思つたら、もう癒つて今は、よ

う寝て居なさると言つてゐたから、赤坊に乳だけ吞ませておゐて、其儘御無沙汰したやうな譯、眞ごに済まなることだつた。其麼かね、」  
玄吉は

「お兼様、毎度済まなるね、」と、謝して居る。

お安は

「難有、何時も御世話ばかりかけて済まなるよ、御蔭で瘰癧も輕かつて今は元の通りになりましたね御心切に難有、又毎度足まで運んで貰はへでも誰になつと貰ふに行りますのに、」

「何のお前様、御互だは、乳の足らなる位困るものかなる。爾んな遠慮は少しも要らなること。」と、お兼は言ふて居る中に、お安は寢所の中から赤兒を抱き起し、お兼に渡す。と、今迄泣いて居た赤兒は泣きが止まり、懐

しそりに乳に食むつゐて、ごく／＼、喜んで飲んで居る。お兼は、お安の乳の不足なるに同情して、少し乳を貰ひに行くのが遅くなると、自ら進んで行つて来て、飲ますの、は例である。お兼は、充分乳を飲ませて飯。と、お粥ができたので、釜を取らんと思つてゐる間も俟たばこそ、子供等は、

「父様飯、母様飯、腹が餓つた。何時食べるの、」と、兄の玄太郎の止るのも聞かず、喋舌つて居る。

お安は寢間に居ながらも知らず識らず、身を起し。

大人が我慢も出来るなれど、蒼蠅のは子供等である。だが、又不愜なもの

子供等である、親の毎に焦がす其心を露知らず、欲しむ欲しむと云ふのも當然、腹の減るのもあたりまゝ、昨夜分け様で食べたのは、二人分にも足らぬ位、思つて見れば小兒心に、も仕方があると思つて居ればこそ、ア、可愛想な小供等と思へば知らず、出る涙、夫に見せじと俯伏して、又もや思ひに沈みながら、今朝のお粥は残り米、三合に足らぬ其米を今食べ終れば跡になる、米もなければ釜もなる、質草としては素よりなし、エ、其塵したら好かろうか、生き効なるとは我々の事、ア、情けなる浮世かと、破れた袖で眼を拭ひ、是でも人間の中間とは、耻しむやら不甲斐なる、怨しむやら、悲しむやらと先だつものは皆涙なり。

玄吉はお粥を釜敷の上を下ろして

「お安サア、出来た。食べやう。」

「妾は一寸、手洗を」と、言ひて手洗に立つた。玄吉は、縁の飲けた膳にお粥を容れた茶碗と、何か菜のものを小皿に盛り、お安の食膳として据へ置ゐて、喧しく言ひつて居た子供等と食事を初めて居る中。お安も入つて来て共に朝食を済ますと、玄太郎は須佐を切り始める。お末は外子供等を連れて出た。跡で玄吉は火鉢の側に座つてお安に向ひ

「お前、気分が好むなら、何とかせねばならん。から、儂は、もう一ぺん、其座にか工面しに行つて来う。」お安は

「近所隣には、爾んなことを言つたところで、出来やふ筈もなし。」と、小首を傾け、暫時考へて居たが、一向思ふ當つた先もなむらしく、思案に暮れて居るのを、玄吉は、然う心配させてはならぬと、

「お安、お前が何も思ふな。近所にはなくとも、幸ひ玄太郎の須佐を持つて行く左官屋へ、頼んで見やうと思つて居る。こんなことは云ひたくなむけれど、時代時節だ仕方がなる。是も此間、須佐を持つて行て、六十錢借り過ぎになつてゐる、云ひ難いが、彼の方は嘆いて事情を語れば、聞いて呉れんにも限らん、拾五錢位須佐も溜つて居るし、然うして其須佐を買つて貰ふ頼んで、見やう。」

「其左官屋様も知つて居るが、何處の家でも貸すが爲め、然う金を遊してあるやうな家が少なる。」と、稍思案の末急に思出した如に、

「虎様に、頼で見なされ。」

「虎様で、誰の事だ。」

「吉原虎様さ。」

「ふん吉原か、彼に何のそんな金があるものか、」

「否、今思出た聞いて見なされ、大概あるでしやう、其は迂つかりしてゐた。此間お前様不在だつたが、遊に來て一寸儲つたと云て、いつにない、元氣で、いつもの様な汚い装でなく、立派な着物に時計まで持てゐた。妾や、此金儲のない時節に其は結構だね、と言たら  
此頃は、一通や二通では儲からん。と、言ふから、何の仕事でと聞た。  
すると

其は言んが、兎も角四五十圓儲たから、暫くは食ふ と、言ふて居た、  
マア、駄目と思つて頼で見なされ。」

「然か、不思議だね、不思議だが、兎も角當て見にや分らん。一足行つて聞いて見よ」と、玄吉は十五六軒隔た。吉原虎吉の宅へ行くと、幸ひ虎吉は

居たので、

「虎様、突然に濟まないが、一寸頼たい事があつて、御邪廣したのだ。其は然うと、お前様大層儲けたそうだね、結構だ。時に、濟まんことを頼に來たんだが、訊めておくれ。實は斯々斯様な譯で、御承知の通稼はなし、仕方がないからの事」と、残らず事情を話して頼だ。

「然か、俺もお前の云通、稼の繼く所へ行つて働かにはや忽ち食ん。然な方法でも取らにや、つまらんとするて見たところ、矢張お前様の言通で。妻子もありや食ひ繼ぎの途も拵へてをかにやならんし、旅費も要る、だが、お前様とは違ひ頼む先がない。エーエ、儘よ糞自暴だと思て、一寸考へ變して、二三圓工面して行て見たら、運克く、とんく柏子に來たものだから、三日で五十圓ばかり儲たのだ、所が昨日朝敗られ失敗だと思ふたが、

昨夜から今朝にかけて、半分ばかり取返した。」

「エ、お前、博奕でかへ。」

「然よ。仕方ないでないか、幾ら政府から厳い言れても、稼なしにや食へるものでなる、俺もこんな事は爲たくはなる、お前も知ての通、博奕渡世をしてゐた、ものじやない。博奕なんか人がすると、俺は諫言したものを、けれど、遊で居たら食へん。負けたり勝つたりするものゝ、食ふ位は却て氣樂だ。」

と、今までの人間と人が變たのか、思へば御互、氣の毒なもの、閑人不善を爲すとは茲の事、去りながら餓ては生ん人の身、否動物は皆同じ事、虎狼餓ては人を食ふ、食ふが爲めには手段は選まん、選で居たら餓死する生て居りやこそ人と呼ぶ、死しては人でも又動物でもない。是は止を得ん

悪戯かと、心の中で思て居た。

「誠に濟まなるが、今お頼した事を、どうか叶へて呉れまいか」と、頼んで更らに、

「一時だけ融通して貰つたら、熊本から飯りや直ぐ返す。」

「俟てよ、博奕と云ふ奴は、取る時や豪儀なもんだけれど、取られた時や裸體一貫、三圓どころか鍋釜まで質屋行だとは、始終之を仕事にしてゐる者等の言草。俺や、まだ爾などこまでいかないが、これも俺とて、いつ爾んなことなるかも分らなるから、貸すことが出来ん、資本だから」

「今晚は必ず返へす、遅くて明日の晝までと思つてゐて呉れたら、託度間違ない。」

「然う、頼れりや仕方がない。」と、財布から、五十錢銀貨六枚出して虎吉



は、玄吉に渡すと、玄吉悦で是を請取、禮を述て歸りかけ、廻り道して米屋に寄り、白米五升を買つて自分の宅まで持つて来る様に頼み置き、外に菜葉とか干物類のやうな、副食物になるやうな物を買つて、都合好く瀧車賃や、一時凌ぎの米代ができたので、宅に歸つて、お安と共に悦んで居る所へ、米屋が米を持つて来たので、長らく米と小中であつた米櫃へ、其を投けると、小兒等は何時も、バケツ、を提げて、買りに行く外知らんに、いつになる澤山な米を見て、手を叩いて悦んで居る。

彼れ等、夫婦の如き、純潔なる精神の人間が、何故に斯うまで零落したかと云ふに、天然に享けたる徳の薄かつたのでてらう。又人の運と云ふ事も、學者の之を認むるところであつて、此運なるものは盛衰がある。盛なるときには、運天に勝つとか言ふくらゐで、少々無理

を行つても、其望みを貫徹すやうなこともあり、危ひ々々と思ひつゝ、行つて居ることも、時には其は却つて幸ひに變じたりするともあつて、決して争はれぬ事實である、其代りに、衰へたときには、是の反對が必ず来る。斯う云ふ事は嘲笑に止める人もあるが、事實に現はれて来るから仕方

がなる。仮令は、日露戦争の時にも、我國の時々危る場合の戦闘に、捷利を得たのを、天祐と言つて居るやうなもので。

玄吉の家産を失ふたのが、衰運とでも云ふのであらう。妻のお安が疾病に罹かる、玄吉は腦を病む、買った物、即ち、商品が暴落する、賣つた物は後に騰貴する、其に加へて、店の者の失策より火を失した。幸ひ、大事には至らずして鎮火はしたものと、商品納家のことであつたから損害は随分

甚かつた。這んなことからトント／＼拍子に悪ひことばかり續ゐて、終に保ち切れずなつて、家屋財産は人手に渡さねばならぬ、始末となつた。其後段々零落て、或る日、玄吉は其不徳を嘆ゐたが、不幸中の幸が藝は身を補ける不仕合とかや、玄吉が父母に十四才の時に離れ、孤兒となつた其時、石工速水藤吉なる人に救はれて、石工となつたのである。

尤も玄吉に親戚がなかつたのではなゐるが、儒者や新後、廢藩置縣後所謂舊幕時代の武門なるものは、大抵零落して終つて、血統はあつても、家産のあるやうな者が少ゐ、玄吉も其中の一人で、親戚に彼れを養ふて、成長せしむるだけの余裕のある者がなかつた、其處で、速水藤吉は成人せしめたのであつて、其頃より彼は學問を好み、彼の父は存命中小學校に行つて

居たころは、學才は衆人に優れ、教師にも將來有望の少年と稱せられ、朋友も又尊敬して居つた。それくらゐであるから、速水方でも晝間は仕事に従事し、夜間主家の要事さへなければ、書籍を讀む事を樂みとして居た。石工の方も成績が好ゐるので、藤吉我兒の様に居つて二十一才、徴兵検査に合格したけれど、抽籤に外れたから、本人の自由に今後爲るやう、藤吉より言つて石屋道具に金若干を與へた。玄吉悦んで其後石工に従事して居たが、彼の希望は職工で終るのではなかつた。故に平生勤儉して貯蓄した金銭を固定に行商を始めた處、彼れを引立てるものがあつて、資本を貸し、商業に従事することとなつたのである。

然るに商業上の失敗より止を得ず、資本のなき彼には又素の職工になつて、生活するより外に途がなゐ、途がなゐから毎日稼ゐるで居た。其時分は

世界体を耻じて居たけれども彼の心中には、其を耻辱とまでは思つては居  
なんだ。常に妻のお安に是も矢張正業だ、人によると失敗の後には其を耻と  
して、我土地に居らず他所に居住して、見悪き姿を覆はんとする人もある  
併し儂は、然うは思つては居らんと云つて居た。其後又病氣に罹つたが  
幸ひに、輕症であつて全癒したので、赤貧ながらも今日の如き、乞食に均  
しの生活状態にまでも陥らず、貧しの中にも夫婦は無論、長男に生れた玄  
太郎も共々稼ぎ、安樂と言ふやうなことは、素よりなわけれど、家内睦じ  
く、是程の心配なしに日を暮して居つたところ我土地には稼ぎが續かず、  
稼ぎがなければ食ふ事はできん。  
他所に出でて稼ぎたると思つても、旅費金とか稼ぎに着て妻子に送金する  
までの、食ひ繋ぎに三十圓ばかりの金は其處しても要る。其れで這ふして

苦んで居るのであつた。

### 岡村 丈平 邸

高利貸岡村丈平の邸には、玄吉或る人の手傳で石かけ積の仕事に行て、其  
から近づきとなり、其後始終出入して居るから、門を入つて玄關で何の挨拶  
もせず、慣れくしゆふ勝手の方へ行かんとすると、岡村何處かへ散歩  
に出様としてゐた折、太島飛白の袷に、同じ羽織、縮緬の兵兒帯と云ふ姿  
で、年は四十四五恰好、金の入齒をして八字髯を貯へ、中々立派な男ぶり  
二三年前とは風采が上つて、人が變つたかと思ふくらゐであるが、變らぬ  
ものは彼の性格と、評されてゐる。今日も玄關の間まで出て來て、洋杖を  
取つて出やうとすると、足音がするので、誰か來たなと思つて、立停つた

儘、見てゐると玄吉であつた。今、玄關より臺所へ行かんとする、玄吉を見て居た岡村が是を遮つたれば、玄吉呼び止められて、

「ゴレはく、旦那様、其處においですることも知らず、誠に失禮しました。暫く御無沙汰致しましたが、皆様御變りは御座りませんか。」と、挨拶してゐるのにも耳を借さず。

「貴様、何要だ。」

「少し、御願申上たい事が御座りまして、御願に上りました。」

「頼ごは、何だ。」

「止を得ません事情で、今まで御出入をさして戴て居りますが、こんな事を御願申上たことは御座りません。ところが「斯くく、斯様の理由で」と、言ひかけるのを中途で、

「分つてゐる、金貸せだらう。今少し都合が悪ひが、併し何程か。」

「何卒、三十……、」

「何三十圓。三圓五圓なら又と云ふ事もある。三十圓なんて貴様に何抵當があるか、何擔保がある。貴様呆氣て居りはせんのか。貴様に可い連帯のある筈もなし、今日は断る。儂は今から市街まで要があつて、出やうと思つて居るところでもあるから今日は飯れ。要も言ひ附けたいが、先度から貴様の様な、風装をして何をするのか。」と、刎ねつけられた玄吉、胸に迫つて、俯向のたまうづくまり、サア其塵しやうか知らん、頼みに思ふて来た。

出入先（死面苦面も一通でして来た。瀛車賃旅費でない外に頼みの綱も切れ遙々訪ねた効もなる二年の間要あれば今来いちやと来い是れせへ彼れせと

こぎ使ひ言ひ様もあろふに飯れとは無慈悲も極る捨言葉こんな事とも露知らず永年辛い要さくもまさかの時の杖柱人の心と秋の空變り易いと云ふものゝ此處まで無慈悲と知らなんだ初め出入をした時にや店は閉じたと云ふものゝまだいくらかの殘金あれば身装も隨て奇麗と云ふでなければも耻からぬ其時分彼れも立吉是も立吉と囃された其頃は金は貸してやる時節を待てよ今では早いと言はれたものるれに事情も克く聞かす直ぐ刻な附るとは余り酷ひ氣強ゐとポロ／＼出で来る悲憤の涙匿しつゝ

「何とか、今御助けに預けますれば、此恩が、」と、云わかけるのを聞かず。  
「大体、貴様の今身分にや、駄目だ。」と、云れて憤懣遣る方なきも、勘忍の強い性質、

「何卒事情だけなつと殘らず御聞取を願います。」と、俯伏た儘、言た。

「貴様、蒼蠅い奴だ。」と、言つて、出て行をとするのを、袖に絶り。もう耐り兼て、

「宜しいです。歸れと言はれりや、歸りましやう。」と、云つて、

其上た顔を見ると、目が血走り、顔面朱を流た如く、形相雷ならね勢に、岡村も僻易したものか、又は従來の忠實を回顧して、憐を催したものか、外に思ふ仔細があつてか。急に言語を柔げ。

「然ふ、貴様怒たものでない。儂が急ぐ要があつて今から出やうと思つてゐたところへ、お前が來たものだから、心も落着かず。言ひ過ぎもし、無愛想にしたのが悪かつた。其麼な事か委しく、離の座敷で聽う。」と、言て手を鳴らすと、庭園でも掃除してゐたものか。下女は、箒を庭園の出口に置

いて行つて来た。岡村は

「離れの火鉢に火を容れよ。」と、言つて玄吉と共に離れに行く。

離座敷は、八疊と六疊との二間、金に飽して、建築せしもの。二間共に別床を造り、欄間には、楓の古木を選んで其に透彫を爲し、床柱違棚は、紫檀、其他は、悉く檜の節なしを選だはの。其六疊の間に案内せられた、玄吉の身装と、座敷の結構とは、不思議な不釣合で、岡村家へ、玄吉が出入しかけてから、二年にもなるけれど、未だ一度も、こんな座敷に昇つた事はない玄吉、迂路々々して居る。

此座敷へ、玄吉を連れて来たのには、深い譯がある。此二人の外、知らさぬ様にしたいから、態々、玄關や、臺所の間を避けて、來賓の外、入れぬ座敷を選んだのだが、玄吉そんな事は知らぬ。不審に思ながらも漸く落着て

段々事情を述べて、嘆願的に借金のことを泣き絶た。岡村は聴きながら其様子を熟と眺めて居たが、聞終ると

「何も相談だが、借つた金は、返へさにやならんとは、昔から分りきつた話。儂はお前に、返して貰はずとも可ひ、仕事をさせるのだ。そうすれば九儲けの、丸取だ。成効の後には、貴様に五十圓遣るのだ。一つ行つて見んか。」

「へエ……有難ふ、して其仕事とは、又御普請でも……、」

「否る。普請ではない。」と、其から聲を小そして、  
「宅の奴等に間かせん。話だが、儂も、一寸、失敗した事があるのだ。其を摘梅、片附て呉れたら、後とは云ん。早速、五十圓渡ののだ。」  
「其は一体、其様な事をするのです。」

「お前、笑てはいかないが、」と、如何にも言ひ悪ううに、躊躇しながら、漸つと口を開ひて、又更に、

「笑なだが、」と、前言きして、

「實は、今年十七になつた初子と云て、今ではぱり／＼藝妓だが、十二三の頃から、舞妓に出てゐた者。儂は、外に、慣染の者があるから、爾んな若い奴は、好ないし、又慣染の奴と、其奴との中が、好くない方で、嫉妬があるから、」と、のろけ聞かされ

「時に、旦那」

「マア、待て。貴様の様に然ふ言つたら話やできぬ。爾んな都合だから、儂は聘ぶ氣でなかつたのだけれど、其奴を抱てある青樓へ、據なく。同僚と云つては可笑が、朋友と一寸飲み居つた、其時其青樓の女房は、儂も知

らん顔でもなし、段々勸たから仕方なしに、朋友は外に聘だ奴、儂は其奴此處迄言や分つてゐるだろ、所が其後二三度聘或晩、青樓の女房は是非裏に座敷を建てたいと、思つてゐるが少し金が足らなるので困てゐる。何とか一時の融通を頼むと言から、儂も金貸は商賣、七百圓貸た。其からちよい／＼行たのだ。すると女房は、初子を落籍と喧しく勸たから、落籍氣がなければど當座遁れに、酔ても居たし首肯たのが元の起り。其時直ぐ氣がついて、外の話に紛かし飯たところが、五六日徑つて京町の今村熊藏と言者が、來ての話にや、其青樓から頼れて、一度は斷つたなれど、段々頼むから止を得ず來た譯と言つて、初子を落籍たに就て、儂の方に貸金の爲取である、證文の七百圓を反古にして、外に百五十圓彼の身體に懸る金がある其を現金で渡して呉れと云つて來た。併し、儂が聘ぶ事は聘んだし、成程

落籍云々に就ては、一杯機嫌で余り勤るから、体裁に首肯いたけれども、其は儂の本意でない。本意でないものを強制的に、そんな譯にはさせなると、儂が言つたのだ、所が今村と言奴は、折々金を貸て遣る奴で知らん中でもなし、其は大分聞たのとは話が違ふ。と、言て飯つた。儂も其儘にして措けば好かつたのだが、つい氣になるものだから、青樓の女房に談判をした、少し言ひ過た事もあつたが、然んなぬるい事では金貸や出来ぬ。所が、今度は三百代言の、毛利實照とか云ふ奴が来て、貴公が、首肯したのは、本意でなかつたから知らんと言はるゝが、精神になきものを、何故形體上に表示した、精神は前にして形體を運表せしむるもの、精神の發動に従つて、始めて身體なるものが活動する。そうして見れば、首肯したのは精神に左右されて動いたもの、今更、本意でなかつたとは言はさなる。

と、非常な勢で喋舌る、儂も蒼蠅から、曩きに今村も来たし、彼も随分儂には儲さした者、今では、貧乏をしてゐるもの今村と云や派の利いたものだ。土木請負と云へば、大抵彼奴の手に落ち、上から下までの信用を両肩に負ふて、立て居る人間、其で好い幸と思つて、今村の来た事に就ての話をしたら、はつ、今村様がど、一寸躊躇したらしかつたから、儂が其に附込で、今村宛の手紙を渡し、此話は、何とか今村と相談して呉れと逃げたら、三百は、貴公と話すより、今村様の方が話が能く分る。御注文なら然ふ致しましやう。と、其日は飯だが、後で聞いたら今村は、岡村が来て頼めば兎に角、持て来た人の、幸便位の依頼手紙が何になる、と、三百に言てゐたうだ。其後青樓から三百と相談して、今村に母娘を預たとの事さ、



「母娘とは、」

「其初子と云ふのは、母親一人娘一人の外ないのだ。つまり、親一人子一人ださ。其處で、此儘にして措く譯にやいかなると云のは、莫迦らしくての、關係でもしたのなら、又諦もつくなれど、」

「何の關係です。」

「初子とさ。」

「其關係からの故障と、私や只今聞てゐますが、」

「貴様無粋な奴だ。爾んな關係と違ふ、」と、言つて

横向いて、庭の櫻が綻びて、ちよつと、赤い色を出してゐるのを眺ることもなし、見たかと思と、又向きなをり、

「其だから断念られななのだ。お前が一度僕の使で行て呉て、今村の様子を

見た上で今村が渡すとすりや、文句がないのだが、渡さない時にや、初子を負なり抱きなりして、連れ出し、俵にでも乗せてお前が知つてゐる、彌八の家まで連れて、来て貰いたいのだ。彌八がもつと若いと、彼奴でも爲るのだが、何分六十八だから、そんな元氣がない。一晚の仕事だ、尤も連れ出すにや、今村は若い奴を置いてゐるから、余程油断も見澄して行らな駄目だ、其處はお前の腕にあること首尾能く行つて来りや、翌朝とは言はぬ、今曉でも何時でも僕が初子を請取次第、引替に五十圓だ。随分甘い仕事じやないか、」と、木に餅の生るやうな話を、立吉聴き畢つて。

腹の中では、莫迦な者もある者、金の外には、血もなければ涙もない、雅味もなければ、風流もない、國も念はな他人も思はん、唯、己の一家さへ榮ゆれば、外に何等眼中なると云性質でも、戀と云ふものには脆いもの。物

質からすりや、自分の如きものを憐れ、人の中には思て呉れるだらうが、無形からすりや、這んな人間程性質の憐れなものが無い。と思て居たものゝ茲で斷りや、金は無論借れん。金を借らずに飯つたら貧乏の上塗、忽ち吉原に借た金さへ返す事も出来ぬ、又借らずにや、どうしても飯れん。困つたものだと色々煩悶の末、決心したのは、幸ひ今村が自分の知らぬ、人ではない。だから、岡村の言ふ如き、極端な事を行らずとも自分の今の身上話からして、嘆て頼み、岡村の言ふやうな事は慙して自分が此事に就て、免れぬ事情あつて来たど、云ふ風に相談を持ちかけたら、人の情を汲み取る人何とか、岡村の満足する様な事にして呉れるであらう。そうすれば血も涙もない岡村でも頼た金は貸て呉れるであらう。と、思案を定め、

「宜い。兎も角、行つて、見ましやう、」と、云ふと、岡村は、得たり賢と大に悦び、

「もう、是で話は終だ。酒でも飲め、何もないが久しぶりだ。」と、云つて呼鈴鳴らすと、下女は来たので

「何か持つて来い、今朝魚屋が置いて行つた、鯛の作りと外に筍と、何か飯食ふ菜を持つて来ひ、其から芳枝に、立吉が久しぶりで来たのだが、一寸相談あつて、爲てゐたところが挨拶を是非したいと、言てゐたけれど、まあ後でも好ど止めたのだと、言てをけ。」

「承知、致しました。」其から立吉は中座して、臺所に行き下女に、

「奥様は、」と、尋ると、

「只今、御居間で、何か御用をなさつて居られるです。」

「奥様に、一寸御傳へ下され。御邪魔して居ることを、」下女は芳枝に、岡村の云つた事、玄吉の云つた事を取次と、芳枝は臺所へ来て、玄吉からの挨拶を受け、年が年中子宮病と、慢性の胃病に苦められて居ても、夫に連れ添ふ女房は又因業な者、甲々した聲で、「玄吉お前、大層寒だね、世に貧乏ほど辛いものは無いと見へるね、そうして何しに来たのだ。宅からの要事で呼だのなら、瀝車賃も爲て遣るが、宅から呼ぶ要事もなし、貧乏の中から瀝車賃費つて、」

「止を得ません。事情がありましたしてお金を少々御借申たいと思ひまして、只今旦那に御願申上て居たやうな譯です。」

「何、金借に、旦那も旦那だ、金借に来た者を離れで、茫氣てるやせんのかまあ、一服するが好い。」と、言ひ放ち、

自分の居間へ行つた。

玄吉は離れへ戻ると、間もなく馳走や酒を出した。岡村は、上機嫌で待遇飯も玄吉に食せ、懷中から壹圓出して、車賃は首尾克く行つて、彌八の宅迄連れて来たなら、其所で渡す様に、彌八に渡して置から要らなわが、是は夜が更けると、腹が餓るだらふから何なつと、食ふ爲に遣るのだ。」と、渡した。

今村熊藏邸

今村熊藏と云へば其頃迄は土木請負業として、派振りを利かし、若い者の十二三人は、其家に堪へず、食客して居る。家の構はさほどでもないが、家の周圍には杉や雑木を植て、生垣としてある。土塀や板塀とは

風流なところがあつて、一寸何處かの別荘かとも思はれる構、其生垣の上  
手は本家で、本家の外、土藏もなければ物置や、離座敷の様な物はない。  
併し空気の流通がよく土地は高いだけ見晴しも好い。一直線に西四五丁、  
上熊本の停車場を見て、花岡山は西南に手に取る様に見へる。  
生垣の少し西下手は公道で、とろくと五六歩垣づたひに登れば、北向に  
門門がある、其門より又五六歩で、本家で、住む人によれば玄關と云ふ  
間である間取は奥の間十疊、其外、八疊六疊四疊半と、臺所を交せて七間  
ある。

其玄關とでも云間に、年上好三十五六位の、法被姿の顔に苦みの走た男が  
同じ法被姿の五六人と、地圖か設計書かを擴げて見て居る。  
玄吉は案内を請ふと、二十五六の男が早速出て來た。玄吉は自分の姓名を

言ふて後、

「親分に、少し御願申上たい事がありました、御窺ひ致たやうな次第、御在  
宅ですか、」と、訪ねると、其男大分、慌者と見へ、

「親分が居れるが、君は儂が知てゐる。然うく、親分に使役れてゐた事も  
あらう。一二度工事のあつた時見た、だが、今は仕事がないで、儂等  
へ毎日親分に養はれて、遊でばかり居るのだから、」と、簀から棒見  
たやうな事を、誰も尋ねもせんのに、獨り喋舌てゐる。

三十五六の男は、

「吉、貴様何と言ふ事だ。馬鹿、そつち行け、」と、叱り附け、玄吉に向ひ  
「親分に何御用ですか、取次まじやう。」

「失禮ですか、取次いで頂ただけで濟む要とは違ひ。是非親分に、直接御意

「得たい譯があまりまして、」

「左様か、其では親分に其由通じまじやう。」と、奥に入り、今村に其通言よ、

「然か。此處へ來やせ。」

「けぞ、親分、乞食見たいな風した人間、奥へ通すなんて、吉太郎の野郎、親分留守と斷りやよかつたですのに、」と、呟てゐる。今村は聞答め、

「儂に、是非頼たいと、態々訪ねて來た者は、何な汚い風でも厭はん。儂は澤山な人間と交際して居れば、此方では忘て居るにせよ、先方が、儂を知つて頼みがある故、直接面談したると言つて訪て來た者差支がない是へ上よ、」と、言つたから仕方がない。玄吉に奥へ通れと案内した。案内された玄吉が奥に入ると、今村は、大な、友染に壯丹を染出した座薄團に、安

座して新聞を讀んで居たが、玄吉は來たので、直ぐに止め、玄吉に客座蒲團を勧めて、

「あ、いつか見た事のある顔だ。久々だね、」

「ハイ、誠に御無沙汰致しまして、要事があれば、つかく御邪魔申上、何卒御許しを願ひます。時に親分此頃は相變らず御繁忙ですか」と、尋ねると、お前等の下仕事を頼んだ時分は、不景氣と云つても、斯ふでもなかつたが、年々好い方に向かないので困るね、其麼だ。此頃は、

「はい、食へなから困ります。」

「斯ふなると皆同じ事だ。下流の貧民が困る奴は、中流に及し、中流に及ばす奴が、上流に及すのは當然で、數理から行くと六七分までは下流だからね、終には、其麼なるのか知らなれて、上流の者から、今緊乎して方法を

着けんと、將基倒しにならねば好むがと思ふ。儂らの宅でも、工事が無くて間隙だからといつて、若い奴等を今更放り出す譯にも行かず又々好い時節もあるだろふかと待てるのだ、待つだけ野暮かも知らないが、儂には然ふは思つて居らん。必ず、好仕事もあらうと信じて居る。だから、我慢して居るのさ」と、言つて、からく、笑つてゐる。

「御宅あたりは、何と云つても宜いですが、私など何共仕方がないです。」

「何同じ事だよ、大いに行れば其相當の費用が消へる。若い奴等でも、外に好い事がありや何も儂の宅に限つた譯ではなし、何處へなつと食ひつきも仕様が、其が出来なる。今儂は放り出したなら、何れ正當で食つては通らんに違ひない。爾んな事が其處でもさせなる。だから、食込は承知だ。然ふ

して助けてども遣らねば、忽ち三十人と云ふ者が困るのだから。」と、又笑つてゐる。玄吉は如何にも云ひ難そうに、手をもぢくしたり、座りながら身體中を動かさせて居たが、漸うく思ひ切つて、苦しそうな息を吹いて。

「時に親分、今日御願に出ましたのは、余の儀ではないのです。岡村は私の出入先、今日此地に、一寸要事があつて来た所、旦那に會ひまして、久々のこと、色々四方話の末、と、一寸口籠「ゑー、」

如何にも言ひ難くそうに、脇の下から汗の流れるのを拭きく、

「おは。ゑー。お初とか云ふ藝妓、貴公御承知ですか、」

「ふん、初子だろふ。」

「然うく。初子、」

「初子が其麼したか。」

「其初子の事に就きまして私か、」

「お前、其麼したのか、」

「私には、彼れの身上に就て、御同情願ひたることが、」

「マテ岡村が、」と、漸時思案の末、

「岡村はお前を使喚して、儂の宅へ來さしたものだ、儂が何と言ふか、探らしに來たものだ。余計な言敷は聞くに及ばん。お前隠ても駄目だ。飽迄も隠すなら、儂の宅には要がない。外の話なら、緩々遊ぶも可いが、其話なら要がないのだ。」言はれて、玄吉、サア、失敗つた。先見の早むこと、道がは、さあ今となれば、子分未者の二百や三百、手足同様に働かす人又其者等も親分親方と慕て、手足の如く五本の指の如く、迹二無二働く事

を鴻毛よりも猶ほ軽く、火水は愚か命かけ、働く事を厭ぬこと。

、だが、先見のみではそう人は運くものでなる。其處に彼の人の徳かあるのかと、一べんに荒膽をとられて終つて、無暗に感心して居る。

今村が斯うして手足同様に働かすのは、全く施徳にあるのであつて、世の中に施徳ほど強むものはなる。施徳は物のみのものではなるが、今村のは物も心でもある。

荒膽をとられた玄吉は、成程人の頭となる人は、何かに附けて抜け目がない。獨り威張の偉がりは、已れ一人威張た所で、誰も心底から服従する者がない。道が偉いのは今村だ。今村の眼力、今村の善行、自然に呼ば今村の徳、こんな人に隠した所で、却て禍こそあれ幸あるべき筈がなる。先を越されて思案を定め、

「全く、親分に嘘を言ふ積りではなかつたのです。が、悪ふ御座りました。御断り致します。此地に要があつて岡村と遇つたと言ふたのは、全く偽りです。」實は私の家は斯様々の理由で、其が爲め、岡村へ金を借に來た事から、岡村が玄吉に對して爲し舉動等、初子連れ出すに就て、岡村が言ふた事だけ除いた外、皆語つた。

今村は、

「然ふすると岡村が、儂の所へお前を使として、初子を渡して呉れと言つて來たのだ。其は委く儂には讀めて居る。だから、初子の話でなら要がないと言つたのだ、物を考へて見よ、初子は人間だいくら岡村が、金で面を押へやうとしても、肝腎の當人が嫌だと言へば仕方がない。禽獸を買つて、飼ふ様な譯には行かなる、即ち人權だ、金力の爲に人身を抑壓する事は出

來ん。岡村の如な金の外、眼中何物もなると言ふ奴は、爾んな目に、何度も遇して遣るのが好い。其も社會を保つ一つの融通だ、青樓も夫れで食へたもの、藝妓も浮ぶ、互に融通は社會の爲だ。這んな客みつたれたことでは、貧乏人の融通がつかん。其も融通の一つだから、」と、笑つて後「死なれた伊藤公が偉い、南州翁は偉い、國民に融通を與へる模範となつた人、青樓酒飲む者が、風教上可くなるとか、貴賓席に藝妓を聘するのは好くなるとか、何が貴賓か爾んなことを言つて居る奴等は、其麼な神聖なところがあるのであらうか、伊藤公は藝妓を聘ぶのも、青樓遊するも社會の一の融通と、言つた事がある。又大西郷は子孫の爲には美田を買はずと、言つて、自家以外に融通した人、是等の大偉人は、家の金庫番をする守金奴とは正反對で、眼中には金何物かも止めなかつた。其代り貧乏で終られ



たが惜いものだ、兎も角偉の所があつた。併し、這んな余計な事を言つてゐたところで、お前も心配の中に埒があかない、忽ち困るだらう。氣の毒なものだ。」と、言ふて、暫時手を拱き、首を横に傾けて居たが急に手を鳴らした。

そうすると妻のお瀧が出て来た。お瀧は年頃三十三の美人、瘦方で身丈のすらりとした女、行儀正して座りながら、玄吉は會釋して、何か言ほふとして居るのに氣附かず今村の顔而已見詰め、締つた口元を開ひて、

「何か、御用ですか。」と、尋ると、こつちへ來ると、今村が言つてお瀧の耳に口當てて何か密々囁いたかと、思つて居るとお瀧は承知して、臺所の方へ行た。此お瀧と云ふのは、今村熊藏の妻で今村が全盛時代、八百五十圓掛けて落籍た者、臺所へ行つたお瀧は、岩吉と云ふ若い者を呼で、主人

を一寸此處迄と言ひ附け、今村を呼びに行つた。岩吉は其由を今村に傳ると、

「然ふか、」と、立つて臺所に行く。臺所には、大きな臺輪の火鉢が置いてある、其火鉢に凭て、長い烟管で煙草を燻して居た、お瀧は今村が入つて來るのを待て、

「貴公、三十圓て云ひなさるが、金なら十二三圓しか有りやしないよ、」

「然ふか、夫れじゃ仕方がない。儂の外出の時指す、七夕の指環を持つて行きや、二十五圓や三十圓は宅の顔だ、貸すだらうから、借つて來い。」

「だつて、質屋も此頃は非常に困つて居るそうだ。其は、置きに來る者ばかりで、出しに來る者が無い。入れたり出したり爲てこそ、質屋も保てるが置く者ばかりだから、資本が續かん。其で余程安けりや兎も角御斷だと云

ふそうだ。其麼か知らん、貸すか知らん。」と、透き徹る如な、白ひ肌の顔にボツと櫻色した頬、乱れ髪二筋三筋口に食へて、鈴帳眼で、笑を含み今村の顔をじつと眺て居ると、

「まあ。持たして行つて見る、」と、云つて、奥の間に再戻り元の通り安座して、玄吉に、

「若い者が大勢居ると、時折儂が叱りつけな爲らなる事ができるから困る。」  
「否る、貴公の御使ひ方が宜いから、爾んな事がなるでしやう。けれど若る衆と言ふものは氣樂なものです。」

時に、親分好い事でもありましたら、其麼か御引立を願ひます。」

「ありさへすりやだが、儂も、随分高い利息の金を借て、請負もしたものだ。爾んな金でも借る時分が人は好いのだ。今は金借る必要もなければ、借つ

た所で返へす事は不可能、踏み倒や兎も角だが、今から一二年も這んな風だつたら、踏み倒す位は朝飯前の茶漬の如に、人が思ふやうに爲らねば好いが、年を遂うほどそんな者の殖へる今日、洵に心細る話だ。」と、言つて居ると、岩吉は三十圓持つて来て、今村に渡すと、それを請取て、  
「もう要がない。そつちへ行け。」と、岩吉を立たせて後、玄吉に三十圓を渡し、

「是はお前に遣る。其共お前が此先立身して、返しても差支のないやうな身分になつた時は、お前の心任にせる、今は一時、お前等家族の者のお前から事情を聞いて、誠に憐の者と思たから、恵むと云つては失禮だが、凌ぎをさせる。三十圓で食の繼ぎの途ができるのなら、安なものだ。」と、言つた。夢のように思つた、玄吉は前に列べて呉れた金を見つめ、遽かに俯

伏して、泣いた。泣いて居つたが、漸々涙を拭いて、

「此御恩は忘れませぬ。私夫妻だけではない、子孫に傳へて忘れさせません。

又此御恩を忘れるようなことでは、人ではありません、有難ふ御座ります

忝ふ御座ります。御心切に甘へ辞義なく一時拜借致します。」と、三十圓

の金を二度も三度も戴て、汚い千切れかかつた財布を取出し、其に納れ

て、

「御妻女様に御禮を申上たいです、何處に居られますか」

「別にそんな事は要らん。其よりは一時も早う飯つて。妻子を安心させよ、」

「其では私の氣が、濟まなるですから、」

「儂の言ふ通、早く飯れ、」と、叱る如に言はれたので、お瀧に挨拶もせぬ

じまいで飯てしまつた。

今村の立てられるのは、此處にあるのであつて、大概の人なら指環まで質

入して、如何に難澁の者でも救ふことはせん、其度胸は萬人の慕ふて服従

する所であつて、義侠の人と言ふよりは、義と云ふ方には勇む肌の人、即

ち、義勇衆に優れた人と言はねばならぬ。

土木請負業と云へば、中には贈賄をして、其請負たる肝腎の工事を濫粗に

するものもあつたが今村は、國家又は社會と云ふ事に觀念を抱き、爾んな

悪弊を打破せんと勉め、上を重んじ下を憐だ人である。

熊藏が、躰の芋を切つた時分は、父熊之進が而かも已れ一代に創りあげた

財産、拾萬と稱した。然るに熊藏十七八才の頃には數年の不可抗力による

不幸繼の爲に蕩盡された。熊之進は物質的慾望の外、眼中何ものもなる人

で、多くの人類を苦めた、人の精神を苦め、人の精神を殺して、創りあげ

た財産が盡きても、熊之進の身體は残つた。然ふして、今度は熊之進の精神は苦められる事となつて、終に死に瀕かんとするときに至つて、熊藏を枕元に呼び遺言して、我一代は物質慾望に、自我の良靈を奪はれ、希望の如く物質を得たるも、他人の精神を殺して得たる物質が永く保たず、而已ならず、自分の身體ある限り、翻つて自分の精神を苦めらるゝの、煩辛悶苦は自分以外の人には語るにも語られん。噫、苦しい悞しい因果應報とは疑つて居つたが必ずある、仮りに自身一代を完ふしても必ず子孫に報ゆるの時がある。嗚呼悟つた、悟らでならん。國法を犯したのは、體刑金刑によつて罪は滅するも、人道を犯し人倫を無視して、他人の精神を殺した罪は、其血統の遺る限り決して滅するものでない。此事を悟つて、父の創つた罪を、汝はせめて萬分の一でも滅して呉れ、然うして呉れたなら、

今の此苦い胸が幾分でも散じるであらう。早く承知したと言ふて呉れ、と、苦しむゝ息を抑へて、微かな聲で語り終つた。熊藏は、一秒時も早く父の苦みを助けんと、其遺言を實行する事を誓ふた。熊之進は悦んで、噫嬉しい悦しい。其れ訊いて淨佛は出来る。と、言つて、息は消へ失せたのであつた。此遺言を守つた、熊藏は土方から身を起し今では此社會の一方の旗頭として尊重された。然れども自己の利を去つて他人に分配し、已れは常に物質の爲めには不自由をして、多くの窮民を助け、時には多くの人の難儀と見る時は、自分一人に脊負ひて立つ。兎に角已れが身を捨て、他人を生かすの實行のみで、他には澤山ある偽善を装ふて立つ人とは違つて居つた、其は全く遺言にもよるが、父の生涯を見て悟つたのであつて、其邊は普通の人に變て居る。

妻のお瀧も自然今村の家風に慣れ、今村の平生の行ひを知つてゐるから、普通の家の妻なら、根から葉まで三十圓の金の要先を聞いて、爾んな事に遣る金を、指輪まで質入して黙て居るのではないが、お瀧は其後とて何の要に出したかとも言はなんだ。

### 立吉今村邸よりの歸途

立吉は途々、

今村が違ふところのある人ぞ、聞いてはいたけれど實際のことは今日始めて知つた。其に悪く云ふ人もある、其は彼の人の徳に敗けて始終抑へられる、其抑へられた者が悪口云ふのだ。畢竟敵方の誑誑だ。敵と味方は皆然ふだ、いつやら演説聞きに居つた時、矢張敵の悪口言つて居た、御互に言

ひやいしてゐるのと同じ事だ。が、又彼の人を好く言人が、神様見たいに言つて、彼の人に救はれて、彼の人に助けられたと言ふてゐる。自分も今救れた一人である、世の中は妙なもので、善い事が割合に立たず、悪い事は立ち易い、善い事が塞がれ易ふて、悪い事は吹聴され易い人には妬み根性が勝つてゐるからだ。今村の悪口でも云ふ者見たら、自分の今日の有様を話して、彼の人の善行を傳へねば爲らん。せめては當座の御恩報じと、考へながら、

裾の破れた袴を端折り、尻にからけた其さまは見すばらしくも、

唯、除路々々と、急ぐでもなく、立止るでもなし、  
春の夕陽は西山に入つて、暗い道を歩ひて居たが、感慨窮て遽かに背向ひたかと思ふと、

そつど財布を取り出して両手にそれを捧げつゝ、二度も三度も戴いて後又懐  
中に入れ、合掌して今村夫婦に言ふ如く。

「嗚呼、有難や此恩義、死しても忘れむ魂は、孫子に傳へて何とする。  
翼ある鳥四足の、獸でさへも恩を知る、人と生れて此恩を、果さでなら  
じ今己の身を、誰が助る者ぞある。七たび生れかはりても、忘れてな  
らぬ此恩義、あゝ有難や有難し、」と、又も財布取出し頂ひて上熊本の  
停車場をさして、急げる有様を見る人ごとに情け加し、共に涙を絞りけ  
り。

上熊本停車場前の饅飩屋に入ると、吉原虎吉が居た。虎吉は

「玄吉様、今御飯りか」

「あ、誰かと思たら、虎様、どちらへ御越し、今朝程は有難ふ。」

「都台よく、出来たかへ。」

「御庇護様で、」

「其は結構いるところで遇つた。一緒に飯らう。上りが未だ四十分俵にや出  
ん。俺や今日一寸誘はれて、久留米まで来たのだが面白かつたから、此  
處に朋友があるので、少し相談する事があつて来たのだ。俺も久留米で嫌  
な變な氣が出て、急に此所へ来る氣になつてね、」

「其は恰ど好い連れた。だが、お前既う何か食べたのかへ、未だなら一緒に  
どうだ。」

「ふん、俺もお前と一足彙入たところ、」と、二人は、貳錢の饅飩を言つて、  
玄吉と共に三鉢宛食ひ終ると、玄吉は、

「今日俺や嬉しいやら悲しいやら、何とも唱へ様のない氣がする。お前も名を聞

いてゐるだろと思ふが、今村様ね、」

「ふん、今村熊藏様か、彼の人なら偉い人だ其がどうした。」

「實は、今朝御前に話した通り、出入先の岡村へ行ただけれど俺の思惑ど  
うり、聞て呉れねへもんだから、妙な都合で、今村様の御宅へ行かねばな  
らん事になつて、」所が、斯様々々の譯で、と、小聲で囁みて、

「三十圓戴たのだ。よくせき俺の今の身分を……」と、ぼろく嬉し泣  
に涙を弄して語てゐると、外に五六人も饅飩食に入てゐた者があつた。そ  
の中の一人は其囁き話を小耳に狭んで、突然に、

「今村様の、難儀な者を救ひなさつたことが、随分少くはないそうだ。お前  
様甘い事をしたね、俺も頼で見やうか知らん。」外の一人は

「莫迦言へ、阿呆だら。然うく今村様かて、来る者く金遣ていたら、

世界中の金集めても、足るもんじやない。成程、慈悲深い人にや違ひない  
けれど、余程の事情がなけりや呉れるか、貴様の如な餘見たいに朝から晩  
まで、のらくら、爲やがつて賞めるところたら、他人が仕事を一生懸命に  
探し歩いてゐる世の中に、其人等の代りに寝てゐる外はない。阿呆も好  
加減底のあるものだが、貴様は底抜の阿呆だ。」

「是りや。何て事吐かしやがる、多勢人の居る中で、此腰拔奴が、老ぼれ奴  
が。」と、言ふなり立つて、殴ろふとした、立吉其を見るなり、中に割て  
入り、

「何卒、爾んな手荒事を、私が悪かつたです。這んな話さへ私やせながつた  
ら、別に争ひがないもの、俺に面じて其麼か頼む。」と、言つたから、若  
る方の男は眼をむいて、小節を握り今にも老人の方を殴らうとしてゐた手

を引込め、喧嘩なしに済んだ。後殿らうとした方の者が、玄吉の風体を見て、

「ふん。こんねに成らなると、呉れんのだな儂では今少し早い。言ふてゐる中に發車時間に近附たから、玄吉虎吉の二人は停車場に行つて、切符を買ひ、乗車したのであつた。瀛車の中で虎吉は、

「玄吉様、お前は結構だ。俺は羨しい、實は今日も今日とて博奕が嫌になつた。まあ聞てお呉れ、お前と一緒の瀛車だつたらうと思ふ。お前が販つた後へ定平と言ふ博奕中間の者が来て、久留米に好賭場が出来てゐるからお前見たいな、素人ばかりだ訖度儲かる。と、誘ひに来たが博奕や其時の運で、儲かるに限つたものでない。木挽してゐりや、働いたら働いたどけ儲かこのだが。爾んな譯にや無論行かなる事が分つてゐる。だが、兎も角

行たのさ、所が網は下りたのだ。其定平て者は、俺や素人で知らないのだが、仲間で云ふ行燈と差向ひて云ふ徹過打。」

「行燈と差向ひの、徹過打なんて其麼な事かへ、」

「行燈と差向ひてゐつたら、一人減り、二人減り、段々減つて減つてしまつて、行燈と差向ひになるとこまで行る奴で、徹過と同じと云ふことさ、博奕や戦争と同様で切り上が肝腎、引上の時機が肝心と云ふ事を聞てゐるか、俺や好い引上時と思つて定平に言つても聞かない。爾んな徹過の奴だら、けど一緒に来た人間、御附合に行てゐた所へ、びしやつと来た。俺や命からく逃げて幸ひ見附からないで、今瀛車の出ると云ふ時、運好く飛び乗つて熊本へ行たのだ。其で既う嫌でくならん。そこで何か好ることでもと、思つて朋友に遇つて見ると、朋友も大弱りに弱つてゐる。」



「其朋友ていうな、何してるのだ。」

「さあ其だね、俺等とは違ひ、元は同職だが親が少々金貯めてあつたから、資本もあるし、八百屋店を始めた。所が中々克く賣れる、是は甘ひ這麼事なら何故もつと早う思附かなんだのか、間隙なくで遊んでゐる事はいらなんだのに、併し遅滞ながらも、まあ好ひことを思ひついたらと、喜んでゐたところ、其が糠喜貸て行こうなら何程でも賣るが、懸取に行く中々金は集り難ひ、丸で施する如な事もある。是では逆も食ふどころの騒でなひ、元も子も無くして終はにやならない。弗々、怖は氣が指して來たから店を閉めやうかとも思つたが、止めりや懸は無論取れん。其でも自分の仕事さへありや、家内の内職にでもと云ふこともある、又斷念もつけよいが其も思ふ様にやなし。困るけど、まあ斯ふして店さへ帳てゐりや、貸して

も呉れる。今では畧と借食見たひなもの。是も仕方かなる、」と、忿ひてゐるから、

「俺も、何か好ひ事でもないかと思つて、相談に居たのだが、爾んな事で口や開けなかつた。お前は果報者、苦んだだけの効があつたね、時に何時頃立つ積りだ。又何處へ行く積りだ。」

「俺も、何處は景氣が好か否か分らないが、何と云つても大阪邊が好ひかと思つてゐる。又電車道が堪へず、延長してゐるそうだから俺の仕事なら無い事もあるまひかと思つてゐる。立つのは早く立たる。金ができん爲に、立てなかつたものゝ、金さへ這ふして出來りや、明日と云ふ譯にや、ちと面倒いかも知れなわけ、明後日の一番には是非立ちたいと、思つてゐる。」

「成程、電車道になら石工の仕事はあるだろふ。俺の職がつまらなる。昔は

木挽や、餓震知らずて云ふたそうだけれど、今は機械で大概な物は挽から口の干揚のも無理がなる。それは一番困る。お前大阪へ行きや、知己でもあるんかへ、」

「別に知己でないのだ。大阪から、二三里隔た村にあるから、其處へ訪ねて行こうかと、思つてゐる。」

「俟てよ、俺や今何してゐるのか知らないが、何でも出世してゐるうだ。俺や宅へ歸たら、四五年前に來た手紙があるから、探して見て分つたら、假名字斗りでもかまわぬ、俺の手は知てゐる。手紙書ひて上るから其持て行きなされ、若い時分から世話好きな人間だつた。滅多にや粗末な扱しやうまいと、思つてゐる。俺も一度行きとうてくく、ならないのだが金が出來なぬものだからやう行ん、」と、話合て居る中、汽車は大牟田驛

に着ひた。

### 立吉一家の満悦と立吉の出立

立吉宅には、女房のお安夫の首尾如何にと持て居る。

顔是なき小兒等は、父親や母親の心配を、氣に止めそ様な筈もなく、朝から悦んで、千度腕白して遊だのに疲れ、皆罪のない顔をして、枕を並べ、夢の眞最中である。

立吉は威勢克く勇み立ち、永年見た事のない顔をして、開け難ひ戸の悶まるのを、辛氣うに何度も悶まる度、

「ア、かたひ、くく、」と、言つてゐる中に、お安は下りて手傳つて明けた。いつも悶まるのは悶まつても、斯ふ悶まるのではないが、少しでも

早く聞かせたいと、思ふ心が焦て、却て慌てりや廻るの譬、二人掛で開けねばならぬ、滑稽を演じてゐるのであつた。

玄吉は内へ入るなり、まだ座敷へも上らんさき、昇口でお安に、

「儂は、是位難有、こんな嬉しい事がない。安心して呉れ、緩々上つて話を  
する。」と、言つたので、

お安は其言語を聴いて、ほつと吐息した。

玄吉は座敷へ上ると、お安は今朝買た炭があるのを、座敷へ上るまでに、

両手で攫み火鉢につき、バケツで手を洗つて上ると、

玄吉は、お安の病氣後障りがないかを聞き、何事もないと、お安が言ふの

に安堵して、其から岡村に行つた時の有様、岡村の仕打、舉動、薄情なる夫婦  
の氣變り、杯委く話、今村の心切によつて、三十圓を惠まれし事、歸途停車

場に出る迄に、千度悲だ結果が、急轉直過、嬉さの余り、却て氣は錯乱し  
て、茫とし思ふ如に歩けなんだ事、感慨窮まつて、途々今村の悪口でも言  
ふ者があつたら、蹴殺てでも行ろうかと思ひ、又色々の事を思つてゐ  
た事が、夢であつた様に想ひ煩ひ、識らず知らずの間に背向ひて、財布を  
出して戴た事、今村夫婦を拜た事、吉原虎吉に停車場前の饅飴屋で出遇  
ひし事、其他瀛車中吉原が嘆じて居た事迄、漏もなく話畢た後、生きく  
とした顔に笑を含み三十圓取出しお安に見せて、熊本の方に向きなほり戴  
いた、お安は岡村を怨んで、

「今までお前様が、手足で盡しただけでも一通りではなぬ。一日拾錢として  
も五拾圓ぐらゐにはなる。其れもお前様の氣象として、壹圓頼んだことも  
なる、よく詰つた今日の仔儀。」

玄吉は、

「在て過た事が怨で何になる。彼はあゝ言ふ人と、思てゐりや可ひんだ。釣られたのがこちらは白痴だ。」

「今村のお妻女様も、御同意で、」

「親分は何故か知らないが儂は御禮を申上ねば、氣が濟まぬと何度も言つたけれど、爾んな事が好ひ。其よりは一時も早く歸つて、妻子に安心させよと言はれたけれど、儂は其度も、氣が濟まぬと思つて、押して言ふたら今度は儂の言ふとうりにせへと、叱るやうに言はれたから、止を得ず其儘歸つた。」お安は、頭を少し下げ伏眼になつて何か考へて居たかと思ふと、急に、

「勿体ない。一時も早く歸り、妻子に安心させよと仰やつた御言語が、」と

悦ぶと同時に岡村に對する反感を益増して、喜怒交々悲哀に沈み終に泣いた。玄吉も其を見て涙をのんだ。お安は涙を止どめ、玄太郎を揺り起した。玄太郎は眠たそうな眼をこすりく起きて、お安と玄吉の顔を眺めて居る、お安は玄太郎に、

「お前は是くらゐの理屈が分らん、筈はなぬだらう。好く御訊き既う十二と云へば、物に何程か辨のある年、今村様と云ふ御方がお前や妾の如な、見ず知らずの者に、早く安心させやうと言つて下さつた三十圓の御金、萬一此金の的が逸た時には、乞食に近る者と爲るのであつた。父様や母様は云ふまでもないが、外の小兒等に聞かした所で頑是がない、お前は必ず此の御恩忘てはならぬぞ、分つたか、分つたか。」と、玄太郎の首肯くのを  
見て、

「分つたら其で言ひ、お寢み。」と、玄太郎を寢させた。貧乏はして居ても元からの譯の分らぬ、怠惰者とは違ひ、言語動作に憐れで見上たところがある。兎に角十圓紙幣杯閉店後手にも取つた事のない、赤貧者。殊に、此金の的が外れたときは忽ち困る此場合、何時迄経つても催促のない金三十圓入たのだから、是位の悦が不審では無い。

数年の間律義一編で、難澁に悲惨を耐へ、小兒等は、普通生活をして居る家。小兒等に、貴様等の衣物見よ、大いなるつても學校へもやう行かん、浴湯へ何時行たか、爾んな汚いさまをして衛生に害がある。貴様等、政府から教育の此喧い時分、衛生の嚴い言はれる時代に何じや、貧乏人には衛生も教育も知つたもんじやない。又、其は不可能だから仕方がない。と、言はれ泣いて歸る事もあれば、又翻れて居るのを聞いて、お安は残念

な悔いと何べんも思つて、小兒と共に泣くことがある、玄吉も這んな事聞く度に、自分の不効なさを嘆く。赤貧者の這んな家庭ほど惨めなものがないからう。其の夜は夫婦共に物語に更け行きて、午前二時ごろ寢たのであつた。

翌朝は、六時ごろに起きて夫婦共元氣好く、斯ふして金を恵れた上は、縦令、一時間でも時間を空にする事ができん遊で居てはならぬと、玄吉は買物に出て、古着ながらも小薩張とした、裕や兵兒帶、お安初め小兒等にも一枚宛買つた。そうして吉原へ返金したり、當座の日用品に費つたりすると、十二圓ばかり出たので十圓だけは玄吉の大阪迄の汽車賃と、何分旅に出る事ゆへ、準備金として持て行く事とし、其残りはお安に渡し、散髪まで済まして、

午後五時頃お安は朝から襦袢がけて調理した、魚菜に赤飯酒の壹升も買つて毎度乳を飲して貰てゐる、お兼の夫與助と吉原を招き、不在中の世話を立吉から町寧に頼み、皆の客が、内の事は少も掛念に及ぬから、安心して稼ぎなされ、好ひ事でもあつたら知らして呉れど、御互に話合、長らく濕つてゐた。此家庭は喜悅満面に溢れて、主客共に歡聲を放つて居る。吉原は手紙を出して、

「此封筒の表書の通、天満で海野慶次郎と云ふのだ。是を以て行きなされ、」  
と、渡した。請取た立吉は推頂いて、

「御心切は有難い。御世話になる事としやう、」と、虫食だらけの臺所戸棚見たやうな中に入れて、立吉は、立太郎お末の物心を幾分心得てゐる二人に、

「父様の不在中、余り腕白してはならん。仲善くして、父様が歸るのを待つて居るのだよ。又吉原の叔父様與助の叔父様叔母様等の能く言ふ事を聞て温順くして留守するのだ。母様にも、口答などせぬ様に可ひ見だからね、」  
と、言ふて聞かすと、お末は、

「父様、學校へ行く本と靴ね、彼の肩から下げるのね、妾等あんなの提げてよその小兒衆の如に、早う行きたい。」立太郎は、

「父様、俺等黽るのが嫌だ。是ら、須佐切り。貴様の状態見やがれど……、父様が居んやうになつたら、余計黽るかと思ふ。」小兒等は何心なく言ふのではあるが、其を聞いた立吉夫婦は無論、外の者まで感慨措くこと能ず、お安は立つて、外へ出たのである。同じ赤貧者でも、小兒の無い者は何ばか樂なところもある。なれど赤貧者で小兒の多る者の親の心ほど、憐れな

ものなる。其意中推し量れる。玄吉は要らざる事を言出した。来て呉れて  
ある人々に濟ぬと氣付き、氣轉を利かして、

「お前等、叔父様や叔母様達に、御盃を貰へ、」と、飲ました事もない、酒  
を勧るのも其場の体裁、お兼は、何かに氣の利いた女だけ其と察し、

「父様が、ごつさり御金を持って歸りなさる。其時何や個や、御土産持て歸る。

だから、大人しくしてね、今日は父様と少の間の御袂別、叔母様が、此御  
盃上るから是を飲で、父様に上るのだよ、」と、玄太郎に盃渡すと確乎  
握て、

「俺や、やう飲まん、」と、耻しそうにお兼の顔眺て、にこ〜笑てゐる。  
與助は、

「サア、叔父様酌いで遣る。」と、盃の持様を教て、少しばかり酌いで遣

る、是を飲み干して、

「ア、辛、」

「其を父様に、指すのだ、」と、這んな事言て、塞ぎ掛た座敷は元の陽氣に  
復つた。お安も入つて来る。待ち兼て居るのは、姉娘のかかづで在つた  
が、終に歸らぬじまい。此時玄吉夫婦は、おかづが奉公先の主人を非常に  
恨だ、怨で居た上に一層度を増した。

午後八時前皆の客が歸た、後玄吉は、近所へ挨拶に歩た。

玄吉は、翌朝、小倉行連絡して、大阪に上る流車で、吉原と與助玄太郎等  
に停車場まで送られて、大牟田驛を發車した。其時、何處からともなく微  
かに聞ゆる唱歌の聲、

頃は花咲く、時候がら、華に酔よる、人心、浮れ浮れる、者ぞ多い、怠

け易いも此季候、日本魂と人の道、立つば止まじと、故郷を、跡に見返り他の里、知る邊見る邊も、空頼み、倭氣質の、立吉は、今大牟田の、停車場を、妻子に暇、暫くと、立行姿健氣なり、けり。

### 立吉大阪にて稼、中途歸國、妻子に面會

大阪梅田の停車場に着て、停車場を出ると、其繁賑雑踏や、華麗壯嚴を極めたる建物、來往人民の華奢なる装ひ、目も廻る程の商家労働者の働さぶり、東西南北に疾走する電車腕車の瀕繁さ、商店の番頭が來客に對する懸引の模様、労働者は顔や手にまで汗を出しての働さ工合、一として感ぜざるものなる。成程、生馬の眼の球を繰り抜く大阪と、俚言に曰ふが、然もあろふと考ながら、ぶら／＼徒歩で、其所等此處等と眺めて居たが、

忽ち思ひだしたかの如に、車夫に天満までの車を命じ其車に乗つて、海野慶次郎の宅へ着て貰つた。

海野慶次郎と云は、三間間口で可なりな構へ、營業は一寸變た、何でも御座れと云萬屋である。随分、人の世話好と云性質で、相當信用もある。

年は四十位で人間としては活動盛り。

立吉は車から下りて、車夫の言儘車賃を拂ひ、仕事衣物と種々雑多の物を包んだ、風呂敷包を芋縄で縛つてある。其を持って、店先に案内を請ふた。

年頃二十三の清四郎と呼ぶ、番頭か手傳か知れん男が、貴公何らからと言ふとすると、立吉は懷中から財布を出して、其中から吉原に貰た手紙を取出し、訪問せし理由を述べると、出合頭に立吉は

「私は、大牟田の者にて、」姓名は斯々と自分の姓名を名乗、訪問せし理由



をべ陳て、猶ほ風呂敷包を解き何か手土産を出して、其と、吉原からの手紙とを添へて、差出した。清四郎は其を請取、奥へ入ると暫くして主人慶次郎は店に出て、

「其はようこそ御出、理由は吉原の手紙で委細分つた。吉原は此節其麼してゐるかな、小さい時分から、随分氣の固い人間だつた。親が貧乏したものだから、教育一つ碌には受てないが、假名勝の手紙でも、矢張今も固いだけは、あり／＼現てゐる。誠に彼も、好い人間だけれど、余り好過て、當世にはちと不向だ、四五年前に、大阪見物、京都奈良見物を兼て、來いと云て遣たら、其時は今にも來る如に手紙が來た。實は心待に待てゐたところどう／＼來んじまい。其迄は、あく云堅い氣の男だから、年々年始狀も來し、又俺も行てゐた。ところが復つた事がある。附箋は三枚も四枚も貼て

あつた。不思議だなど思てゐたが今手紙を見ると、色々嘆が書てある。不愜な事だ、」と、吉原に同情して話した後、

「お前様は吉原の近所で石工さん、然して、我土地に仕事がないので、遠方から態々出て來られたと、手紙に書いてある。其は殊勝な事だ。マア緩々しなされ、」

「眞にどうも、初て御意得まして、何卒、宜敷御願ひ申し上げます。實は御地に初て参りまして、呆氣に取られました。賑かとは聞てゐましたが、」と言つて、

「今日は是で御暇申上何れ、」と、云かけると、

「然ぢやな、今日俺が仕事先の口、聞てあげる石工の仕事なら、随分あるだろふ。清四郎、八軒家の宿を塩梅教てあげ、」

「はい、宜い、」 玄吉は、

「何から何まで有難う。御世話をかけまして、」其から清四郎は道筋を巻紙の端に、地圖の様に委く書て渡すと玄吉は其を貰ひ、八軒家指して行た。八軒家の宿屋に着て後、玄吉の落膽したのは田舎者の常、唯大阪へ行さへすれば、仕事は何時でもあるやうに、思つて居た事であるが、中々然は行かぬ。四日滞在した晩に下女は、石工様なら既二三年早いと、京阪電車や阪堺もあつたけれど、今では電車が走てゐる、大阪軌道も出来て終ふたし市内電車の延長ぐらゐと云つてゐる。一向五日目の晩に爲ても、仕事口は出来そうにない。懐中と相談すると心細い氣がする。然ふ斯ふして居る中に、海野の周旋で仕事先へ入て貰て、勵み勇で縁で居たが、取る金も多い代に、田舎とは違ひ出費も多い、之は仕方がないとした所で、廣い大阪は

大阪だけ、他所より入込で居る職人も多い。仕事が自分の思てゐたのより正反對に續かなんだ。流石大阪は大阪だけ普通家の仕事がないでもないが爾んな所には、從來出入りでも云ふ職人があつて、其等の職人さへ、仕事に充分繼んで、困て居る位だから、玄吉は一生懸命に口を探たところ、思ふ様がない。

其迄に雑費を差引で、五十圓ばかり残つた内、月々、留守宅へ送金したのは三十圓余、其残額は、自分の手元にあつたなれど、斯ふして毎日遊で居た所に入る金が無くては減る一方、是では耐らぬと、朝食と夕食と而已に節して毎日暑ののに、歸つたところで仕方がなると思ひ、汗と土灰だらけになつて、何處を的とはなく、其道に従事して居る人々に就て、頼んで見たが、毎日々々、閑暇で遊ぶ者こそ出来て来るばかり、忙しむと云ふ

者がなる、忙しなれば、雇ふ人のなるのは當然である。仕方がなるから口入屋廻りをして見たけれど、然んな所に口がありそうな筈もなる。或晩、未だ八月暑ふはあるし、寝るにも寝られず中之島公園に散歩がてら足を運ばせ、ホツと終日の憂を一息に散らし、ベンチに凭れて、今茲で斯うしては居るものゝ、妻が毎日自分は稼いで、何程かでも儲けて居るやうに、思つて居るであらうに、仕方がなる、又遊んで居た分では、忽ち養ひの金も送れん困つたこと、其塵しやうか斯うしやうかと考へて居たところへ年頃十六七位の、縮緬の浴衣を着たのと、絹上布を着たのと、二人の令嬢が、一人宛女中を連れてブラ／＼歩ゐて来て、玄吉の腰かけて居た前の長るベンチに腰かけて、縮緬の浴衣の方は、「静子様、貴女明日寶塚へ御遊散は如何です。芳子様も御同行にとお約束し

てあるのです。」

「ハイ御心切に有難ふ存じます。孰れ御供は致すでしやうが、宅の都合を尋ねて見まして、其上でね、宜敷御願ひ致たのです。」と、断るでもなし、断らんでもなく、体好く、其場を切れ抜けやうとする静子の胸には、語るに語られん、悲哀が潜んで居る。静子は斯ふして同じ學友と表面を装ふて、爾んなことが顔にも出さず又一口も言つた事はなる。同じ學友の中にも我家の都合まで推し量つて、遠慮することなく、両親に駄々つて、自儘に娛樂まんとして居るものがあるも。静子は、此頃我家の内情をうす／＼知つて、然う云ふ陽氣な暢氣な、ことはして居られんと這ふして、親を念ひ兄を想ひ、狭ひ優しむ、胸の中を苦めて居つたのである。静子の家は緊乎とした、親や兄があつて、殊に大商家と社會からは評せられ、家庭には爾

んな惨なことは、毛ぶらゐにも見せては居らず、却て兄などは、遊散や湯治を勧めて居るくらゐである。併れども、彼れの伶俐なる思慮には夫れは辛く思つて居る、人の貧富盛衰は時を嫌はず、いつ何時、變するものとも知れぬ、衰へて貧しむと思へば、然う澤山娛樂を貪るには及ばぬもの。已れに物の不足を悟れば、其に對する、勤めをしておかねばならぬと、足袋や、湯巻、襦袢等の類は、上女中には無論、水仕女にもさせたことが、十二三才の頃より一度もなむ。五六人も女中を使役して居る家庭、折には女中の中より、御嬢様其では妾等が却て畏れ入ります、其麼ぞ其ままにして措ゐて下されませ、洗つておきますから。と、云ふと、お前等は給金の定まつた奉公人、妾は女の心得だけをするのだよ、お前等は其々外に、受持々々の要事が澤山ある、人は皆御互だからね、妾が這んなことをするのは、

妾の身の利益だよ、其よりはお前等は、少しでも身體を御休めと云ふのは常であるから、多勢の女中が皆敬服して、御容貌は美し才子で智慮が深る情は厚る、當時の女學生などには、種々あるが、此お嬢様ぐらゐの方は少ゐであらうと、云ひ囃して居つた。今も上女中の中の一人梅と呼ぶのを連れ、暑ゐので此處まで、涼み旁々散歩に來うとする折柄、又女中を連れて此處へ來る貞子と云ふ、同じ學友の御轉婆娘と遇つて、同伴に來たのであつた。

貞子は

「宅の都合なんて何ですか、是非行きまじやう、芳子様や妾なんか、明日行く派れに十八圓出して夏ゴートを、二人揃へのを拵へたです。貴女にも御相談して、三人揃へのをと、思ひましたが、貴女は、派出な事がお嫌と、

云ふことを知つて居ますから、差控へたです。何も貴女コートを着て行かねばならんと云ふ、譯でもなし、無ければ無くて好んでしやう、貴公など其座なもの着て居らつしやつても、お姿が好しお顔は好し、だが妾や芳子様など、醜ひ上に莫迦だから、衣物でなつと飾らにやね、」と、静子を嘲るやうに云ふ。

「何御戯談を、併し既う弗々歸りましやうか、」

「否へ、未だ早るですよ、」と、貞子が言ふのを女中は、

「早るこゝろがなるですよ、余り遅くなるまでに、飯りましやう。」と、云つたから、仕方なしに飯つた。

皆歸つた跡で、思案に沈んで玄吉は、噫、世の中が色々だ。自分に彼の年頃の娘がある。同じ人に生れながら大變な異なるものだと、考へなが

ら兎も角明日は、海野に相談して見やうと決心して、翌日海野の宅を尋ね海野に遇つて、相談すると、

「大阪で目貫きの場所、船場に大村商會と言つて豪商がある。其家の電話聴だが雑役もすりや、自分の出入先だし、口がある。其座するか電話聴は婦人の方が給料も安ふて、何かに附けて便利も好しだが、お前厭わなければ、儂が頼で遣る、」其時玄吉直ぐ其にでも、食いつひておけば可かつたのに、何分田舎の堅氣者、電話聴たり、話たりする事は其座であるふか、不勤に終る様な事もあるまいかと、臆測して躊躇し、

「難有う、然ふしてお世話願ふ事になれば、一年や二年は國へ飯らなくとも、いひようにしておかねば手支をさせる事となり、手支をさせる様では貴公に對してども、申譯がない。だから、一度飯國して妻子を残てもある

事、一二年飯宅せないと厭はぬ様にして來たいですが如何のものでしようか。」

「成程其處もある。月給で入るのだからね、病氣なら止を得んけれど、其外一時も離れられんのは、彼處等の電話、其なら俺が今行く序だから、一緒に連れて居て、頼でおいて遣らふ、」と、心切にも大村へ玄吉を連れて行てやり、目見へもさせ先方で寢泊して、食物は無論先方持で、月給拾圓と定め其代り暇あれば、掃除雑役も兼る事まで、海野悉く大村家と相談纏めた。然ふして、是で好い五七日遅くなつても、差支ない様に頼であるから、早く飯つて早く來いと、海野が言ふたので、玄吉も事に依たら、お安や小兒は國に置かねば、僅かな月給で此大阪では仕方ないが、玄太郎を連れて來て、何處へなりと大阪で奉公さす方可いと決心して、愈一度飯國する事

となり、大村の番頭手代等にも頼み、海野には元より頼み置き、深く禮を述べ、自分には玄太郎と云ふ十二才の小兒がある。それを連れて來る其時は、何卒此上の御厄介ながら、御世話を頼むと、こんな事迄依頼して、急ぎ梅田に走つたが幸ひ下り列車に恰ど、三十分斗間がある。梅田で粟おこしと福おこしを買て、土産として乗車したのであつた。

大牟田の宅へ飯た時分には、懐中にあつた金が半なくなつていた。小兒等は父の飯たのを見て悦び、父様御飯り、御土産お呉れ。球をお呉れ本は靴はど、附纏ふて居る。お安も夫の飯つた顔を見て喜んで居るが、反面には我地は相變ずの閑隙である。何故歸たのか知らん、歸る位だから大阪も閑隙で歸たのか知らん。無事な顔を見たのは嬉しいけれど、若し然んなのだつたら、是から先は其麼しやうが知らんと、喜憂交々である。中にも憂の方

が胸中を苦てるた。玄吉は、お安の胸中を察して居るから、外の話よりはと思つて、

「海野様に、何から何まで御世話になつたんだ。何は兎もあれ、お前に一番に歸る早々、相談したいのは、大阪でも船場と言や、大な商人ばかり、其處に大村商會と言つて、御主人は大村俊一郎様と云のだ。女中や、番頭手代丁稚を交ると、御家の御家内は別にして、三十人から使つて、大變立派なものだ、其處の電話掛に、周旋して下さつた、」

「電話掛で、其様な事するの、」と、お安は聽答て言と、

「電話掛と言つたら、偉い名が可が、他所から掛て來る電話を聽たり、又こちらから、話をするのだ。」

「エー。爾んな事だけに一人雇つて、」

「然ふよ、爾んな所か番頭様が店務するのに、卓机の上に耳へ當るやつね、(聽信機の事を云)彼を始終置いて、自分に話したり、聞たりして居る、其外の要事にはかり、儂は掛話になるやつだから、大したものさ、」

「道が、大阪の商家は異つたものだね、」

「点で、話どころのものでない。そうして、向で寢泊して食て、拾圓呉れるから、二三圓儂の小使錢に費るとして、七八圓は毎月送れる。却て此方仕事のないのに、彷徨よりは結局優だと思つてね、然ふすりや然ふするよう家の事も極めねばならんから、手紙でいもと思つたけれど、儂は飯た方が埒が早い。又玄太郎も連れて上つて、奉公さす方爲にも宜し、何かを兼て飯たんだ、爾んな都合だから心配は要らんだ、然ふして、お前も手内職を屬んで行きや、氣樂だ、」

「其は結構だ。其方妾も宜しむと思ふ。」

「其は然ふと、稼のないのが一般だ。職に依て無用の長物となつてゐるのも一般だ。儂は大阪に略つと五ヶ月居た間に、大阪の状況も見た。成程、道頓堀や千日前天王寺の新世界だの、電車の中の人山を築いて居る雑踏、北では天神橋川筋の夕涼、中の島公園の散遊、西では築港棧橋の夕景色、取分儂の行つた時は、櫻の宮の花満開であつたが、人出の多ゐると派出なことに、逆も大阪には儂の如な其日々々々を食ふが爲に、追れてく其れでも食ん者があるふとは想はれなかつた、皆大阪とか東京とか云ふが、如何にも云筈だと思つて居つたが、裏面を聞くと中々然ふではない、無い所ではない中には随分悲惨な人もあつて、其悲惨の余りが狡猾なつて、人の忌べき耻辱とか、世に及向ふ不徳義とか、社會の不義務とか、爾んな事は百年前だ

と言ぬばかりに、公々然の大威張で中にも甚しいのは、宿換へばかりして、替る時分には借を踏倒して、東で踏倒せば西に行く、南で踏み倒せば北に行く、丁度大阪市電の如に、東西南北馳けつて居る者もあると聞た。廣い所では大阪に限らず、爾んなものだらふ。又廣いだけ然ふなりや却て住居が爲よいたろうが、人間が矢張人間だから、誰も好い顔をしたいのには當然、借たものは返したいに違ひない、借たものを踏倒して、逃げたくないのは人情の常、爾んな事位知らぬ者がない。又有ふ筈がないのだが、脊に腹が變られないとは茲の事、是を聞ても普通に食て徹れん人のあるだけは充分分る。今村様が、今から一二年もこんな風だつたら、借つた物を踏倒す位は、朝飯前の茶漬の如に思ふ、人間か殖へねば好いがと、云はれたが何やら其は殖るらしい」と、世界見ずのお安に、自分の見たこと聞か



たことを、お前は自分の家にはかり居つて、氣ばかり腐らして居るが世界は廣る、色々のことがある。然う心配ばかりするものでなると、暗々裏に是聞て悟れと言はぬばかりに言つたのであつた。玄吉は、

「随分、疲れた、」と、寢轉んとすると、お安は

「緩々草臥を休なされ、疲れたらふ。一晚流車の中だつたらね、何か食べなさりや、」

「何も、今食ひたくない、」

「其じや、後にしましやう、」と、稍々無言であつたが、急に、

「ね、大阪の方、お前様歸た跡へ、若し外の人でも入て仕ふと云様な事はないでしやうね、」寢轉で居たのに、起復つて、

「大丈夫だ。其は海野様が頼で呉れてもあるのだし、御主人の方も、承知

の事だから安心だ、」と、又元の通轉んで、其日は夫妻小兒等色々の話をして、玄吉も疲れたと、夕飯を濟し霄寢したのであつた。

翌日朝は長寢して、玄吉は八時頃起て朝食を濟ますと、お安は、

「昨日はお前様も草臥て居たし、お前様の事だから、話しをしたなら急に飛立つと思つて、控て言なかつたの、今村様ね、」

「今村様が其麼した、」

「人の噂だから、分らないが監獄へ入りなされたて、」

「エー。今村様監獄へ何時、何時聞た。何したのか、」

「何でも他人の御金を費消だとかで、其もまだ七八日前だ。未決監とか云監獄に、」

「そりや大變だ。儂が監獄へ面會に行つてこないでは、」と、狂氣の如く手

足を顛せて、直に立つた。

「マア、御静まり。御恩人の今村様、妾が聞いた時でもお前同様然ふ思つた。歩いてでもとまで思つた。だが新聞を借うと思つても、知つた先にはなし一枚賞に行つて、讀たのには警察迄行つたと云だけ、他人の話には未決監と言つて居る。又虎様も虎様のは賭博で、二十圓の罰金が出来んからだと虎様の宅へは見舞に、一寸した物持つて行つて置たのだ。お春様が泣いて泣き明かして、氣の毒でね、」

「何だ。吉原も、困た事が出来たものだ。儂は昨夜、吉原のところへと思つたのだが、疲ても居たから、今朝々飯食て、行ふと思つてゐる所へお前の話を聞いて、」と、一先づ落着いた。

「然ふ云都合だから、虎様のは近いけれど、今村様のは熊本迄行くのだから

近い方曩にしては其麼だ。今村様へは言迄もない事だけれどね、」

「其も然ふだ吉原に遇つて來、」と、吉原の宅へでも行く様に、どんぐり行つてゐたが、監獄での面會には相當の手續がある、普通社會の人に面會する如な譯には行かん。受附看守は、其手續を言聞した。暫く待て居ると、看守は、

「吉原虎吉は既決囚だが、明後日は満期放免だ。彼は換刑處分で拘束されて居るので、明後日出る早朝だ、」

「ハイ、然ですか御手敷を掛ました。明後日出るとすると、明日一日だけの事、明後日朝迎に來て遣りましやう、」看守に禮を陳て、飯てお安に此由を話を、

「熊本へ行かにやならん、」と、玄吉獨り言、お安は

「熊本へ行かねばならん。ところが前様、土産物を歸るなり、小兒等に分て道つた跡が、其儘にしてある。彼を其麼するの、」

「然ふ、儂も思つて居ながら、何か頭か變になつて迂加々々してゐる、彼は今村様へ持つて行くのと、ちよい／＼近所へ留守中の禮歩きに行く時、配ろふと思つて買つて来たのだ、鐘詰のは福おこしと云て、粟おこしとは上品なのだ。今村様が無事で居れると一隨に思つて、珍らしむ土産と思つて居つた。所が福おこしに就て不思議な事がある。今村様の不詳事が、今思ひ當る。其は岡山驛前二十丁ほどと思ふ頃、瀛車の柵に皆一緒に、細繩で縛つて、梅田前のおこし屋から爲て呉れたなり、乗せてあつた。其に解けろうもない繩がばら／＼になつて、福おこしだけ轉落た。克く見ると細繩の縛り様でも、嚴つかつたものとみへて、切れたのだ。其で別に不審にもせず

縛らぬ儘乗せて置たが三田尻を、一哩程も越へたと思ふ頃、別に瀛車が揺るのでもなし、普通に走てゐるのに又落ちた。妙な事もあるものと思つて、元の通乗せた。今、今村様の話を聞との虫が知らしたのか、」言中にもう涙含んで居つて、

「嗚ぞ御無念であるふ。彼人の氣象として、已れの肌身に附ける爲めに他人の金を着服するなどの、賤い汚い疚い事が何處までもない。若しあつたなら佐倉惣吾の如な、數人の身代り救民の爲の人爲獄。嗚呼御痛はしい此義人、徒勞々々棄て何とする。是等の人を捨たなら、世は黒暗の巷街と化せん、」と、感谷つて眉逆立て安座して居た兩膝を両手で押へ、思案に暮れて居る所へ、父が飯たどの知らせで、娘のおかづが、奉公先の主人に頼て、一寸飯らして貰て宅へ入ると、是又涙含んでゐる、お安は其様子を見

て、何れ非道の山口、容易で飯さなんだのに違ない。其で涙含んで居るの  
だとは察して居るも、態と聲を大ひして、

「お前父様 飯りなさつたから、母様から使を以て、頼に三度まで行たの、  
其に飯て来て父様に何も言はず、俯向てゐるなんかなんだへ、」おかつが  
涙を隠し、漸く、

「父様御機嫌克う御飯り、妻や父様の立ちなさる時にも、御使呉れたから、  
段々頼で半日だけでもと、夫れはくは、口の酢くなる程頼だが、旦那様  
や奥様が、然ふ氣儘な事はできません。お前のは、五十圓と云前貸をして雇て  
ある身體、其にお前の親爺が、此間も他所へ稼に出るに就て、色々金も  
要る。誠に濟なるけども、三十圓だけ貸て呉れと言つて来た。克く考へ  
て見、鉄面皮い、爾んな奴のところへ行つたら、碌な事は教ん、其共五十

圓さへ返しや、何時なつと飯るが宜いと云つて、とうと飯らして呉んじ  
まい。妻や悔くつて、五十圓の御金借てあるばかりに、云に云れぬ辛抱  
もして居る。今日も中々一通りや二通りで、飯して呉れたのではない。  
番頭様が妾の爲に、旦那様に怒て下ださつて水仕女に、給金の前貸の例も、  
成程少なゐが其儘戻つて来ないのではなる。半日なり一日なりすりや、戻  
るのだ、私が引受ると、言つて下さつたので、漸どの事で、と、利々し  
の眼元が潤んで、知らず落した、露一雫、辛むと言はぬが考の道、一層黙  
つて居らんかと、娘心にもだへて居たが、一層こゝで打ち明けてと、更  
らに心を翻へし、父母の顔を眺めて見ると二人とも憤慨の色は顔に現はれ  
て居つた。おかつは

「妻や辛い、父様の偶ま飯つて、偶ま會て、這んな事が聞したくはない。だ

が、外に、何處か前貸して下さる家で、もつと好い御家がないものだらうか、臺所の事でも、卑しい話だから言はないと思つて居たが、番頭様が兎も角、雅様等は、妾が爲るかの様に忿く、妾や何んな物頂戴しても、餓いさへなければ、父様や母様、父妹や弟の事思つて、何でも厭われない有がたく思つてゐるが、三度々々食べる事に、丁稚様が妾に當附るやうに言のを聞くのは嫌だ。何も妾の知つた事でない。臺所の方へ出す賄のことは、御金で極である。十六人の御家内に、十五錢内外で、お菜が何好いものは出来ますものか。御夫婦と嬢様番頭様は別だけれどね、一ぺんも番頭様が妾や臺所で雑巾縫てゐたら、奥で、旦那様と奥様二人の前で、臺所の事に就て、諫言らしい事を言つて居なかつた。そうすると旦那様が、爾んな意見がましい事は聞かん。當今の人間が其だから困る、贅澤だから貧乏する

のだ、是から先は年々不景氣になる、景氣が回復と言奴が莫迦だ。年々不景氣になる原因がある。今の人間を見比べると團栗の脊比で、喋舌だけは儂等聴ても譯の辨ぬ、六ヶ數事ばかり言てゐるけれど之を回復さすだけの傑出人はない。今度歐洲の戦乱にでも儲けるどころか、對岸の戦争に我國の不景氣、何の事か兎も角、外から好う儲けん國は、重箱の中の摺み合ひより外仕方がなる。其摺み合ひは、即ち自家の警戒となるのだ。此自家の警戒と警戒とが不景氣の原因だか、爲ることがなければ、矢張仕様がないう野倒る奴は、のたるだらうし、爾んな事には、此方が頓着はない。結局自家本位だ。若る時から爾んなに思つて居たが、年々然うなるのでなるか、殊に風上に居る華族だとか、富豪とか、多額納税者とか、稱へる人が皆此警戒をする。ろうして見れば、儂は矢張其通、警戒して居るのだ。今の世

は理財主義、利己主義、節儉主義で金銭萬能さ、是よりは外に途がないと思つた、だから、自家利慾の爲には、手段方法は選んで居られん、仁義道徳、ヘン何だ。ろんな脳裡は天空に飛んで終つて、今は宇宙を翻けつてゐる。

今進化論者の中には、對人主義と云ふ事を論じてゐる。此處で儂が云ふのは違ふが、分り易るやうに云ふと、例へば、今茲に貧しき一家が在る。子は孝行であつて、精神的親に孝行の道を盡らうと欲うも、單に精神のみにて物質なくば、其親を満足さすだけの、孝道を完ふすることは不可能。然うして、物質を得んが爲の代償を、己れの勞力によつて、正當に需めんと欲つても其勞力を買つて呉れる者なくば、隨て代償を得て、物質を求めることができん。止を得ず孝道を盡すことができん所から、己れに良

法とては他になく、盗みを働いた、ろうして見れば、孝なる道徳が盡すことはできたが、人として爲ることのならぬ盗みをして、社會の道徳を破り且つ被害者に不道徳を働いて、迷惑を與へる。這ふなれば即ち對人主義で一方に善ければ一方に悪くなる、這んな場合には、何ちらが人道上徳義上善いかと云ふことになるが、

我國民性としては、昔は忠孝の爲には、己れの身を犠牲とするを辞さなんだ。又忠孝の爲に、國法を犯してまで、其罪に座するを潔ぎよしとして、賞揚されて居る者が多い。然るに今日では、忠と云ふことが廣くなつて、眞正の忠なるものは、陛下に對する意義の外がなぬ。然うして物質慾が勝つて進まんとしてゐる今日だから、此念慮が薄らゐで來るのは當然。畧と這んなもので其間を都合よく採つて行れば可ひのだが、今分では迷ふて居

る。此時機に乗つて今の財産を、他人が泣こうが吠へやうが、爾んなことには頓着なる十倍にするのだ。現在の身代にするまでも、徹頭徹尾、自家の警戒に重きを置いて、前言の主義ばかりを採た。其で貴様を此家の養子にする、約束をしてある即ち親子だから、言のだと、聲を低ふして、随分悪い事も今懐顧と慄とする。併し爾んな事は、誰も知らぬじまいお前も其心得でと、妾にや其一番終いの小聲での言語が、明瞭とは聽へなただけれど、微かに聽へた、と、玄吉は訊き畢つて、這んな六ヶ敷話を聽ゐて、忘れず、自分に話す記憶心は彼れの爲には祖父玄齋に似て居る。今茲で中之島に行つた時、自分の前のベンチに腰かけて、話をして居つた令嬢達のやうに、元の身分であつて、女學校にでも學ばせたなら、貞子と云つた、彼んな蓮の實のやうな莫連者よりか、遙か優るやうにならんにも

限らぬ。親の慾目かも知らんが爾んねに思ふ悲ふことには其ができたがせめて精神だけは向上さしたるもの、そうく此間も、今の日本の人は魂や實力を却て無視し、金で創つた肩書を的にして、飽まで人を馬鹿にするのが流行する、爾んなものゝ流行する間が、碌な事ができらうな筈はない。大体日本は生ま進みで困る。先進國では貧富の差が甚しむて、逆も我國のやうなものではなる。悲惨なのがあつても、直接間接に、精神に慰安なり娛樂なりを興へて、精神を向上せしむるの方針をとつてゐる換言すれば、物質上の敗者を育てるやうにして、決して擯斥はせん。然るに何等の徳も施さず、物質上の敗者と見れば、頭から排斥するやうでは、精神の向上しそふな筈もなく、却て敵同志見たやうに、終にはなつてしまふ。と、大阪から歸りに瀛車の中で、太る洋杖持つた書生様が、朋友の書生

に話をしてゐた。何處の國でも、貧乏人は皆同じやうなものであらうが、自分の又別物か知らんと、こんなことを考へてゐたかと思ふと、急におかつの顔に眼を注いで、

「親の口から、這麼こと云ふのはお可笑むやうなれど、お前が學校での成績は、優等ばかりであつた。品行も方正と云はれて、父様は失敗した翌々年高等小學を恰ど卒業した、教師は惜がつてくれて、是非女學校に入れよ、有望だと勸めて呉れたが、其が出来なで、以來苦勞のさせづめた。今暫くの所、辛抱して呉れ。緩々して居られる身體なら、又外の口を探してなつと、其塵にかするも、父様も今度は、急いで大阪へ行かねばならん。其に就ては、」と、話をして居る折柄お安が、おかつの話を聽て、胸に一杯になつたのか、實際使所へ行たくなつたのか、便所へ行たのと行違に、電

報と投げ込だ、玄吉は見ると、大阪海野から來たのであつた。早速封切て讀むと、オオムラノクチツカヘヒトイレタヨキコトアレバシラス、とある。玄吉は直ぐ懷中に捻込で、そしらぬ顔をして、「だから、又儂は金貯めて送つて、宅へ歸らす様にする。何時迄も難儀はさせんから、」と、話す語が顛ふて居たが、改まつて、「母様に、偶まのこと御馳走でもして、貰が宜む、」と、言つて、お安は未だ入つて來ぬ間に、

「吉原へ一寸行つてお春様に、」と、言ひながら、出て行た、此時我娘の嘆や、今村入獄に就ての慨嘆、吉原に對する同情、今一つは其中の、一番く、胸裡と腸の底迄刺戟し、脳味噌を破壊したのは海野からの電報の落膽であつて、心裡状態が咄嗟に混沌として、何ものかとも辨へぬかと念



ふ中、又、突然萌たのは、恐ろしき慾望であつた。

### 今村熊藏と、山口初之進との激論

大牟田に、山口初之進と云つて、五間間口の家があつた。余り其場渡りの商ひをして、其時に利さへあれば賣つてしまつて、買つた者は後日其麼迷惑しやうが、爾んな事には少しも頓着なく、眼前已れに利さへあれば、其で善むと云ふ風の商ひふりを行るから、自然客足が減り、何時でも客の入つて居るのを見たことがないと、云ふぐらいであるが、金はウンと蓄めてあつて、別に商賣などは其麼でも可むと云ふ生活。此初之進は二十四五年も前に行つて来て、種々雑多なことをしてゐたもの、炭坑で儲けたと言ふて居るのは表面、其外のことでは他所に出で、大抵出資者と請負人を泣かし

て、体よく其場を遁れ、今の身代の土臺を創り、其後狡猾なる得意の惡棘を百方盡して、今日の榮華を夢みて居るのであつた。年は六十に近ひ禿頭をふりまわして、益老ゐて益慾ばり、取る事と云つたら葬りに行く死骸でも、犬の死んだのでもかまわん。其代り出す事となれば、唾も厭やと云ふ性質である。

山口の裏座敷十疊の間に、三十八九四十かとも思ふくらい、眉毛の濃る眼は鏡のやうで、鼻筋通り、總體の筋骨逞まじき、豪傑肌の男が、締まつた口元で敷島を燻らして居たが、終になるのを俟つて、山口に向ひ謙遜の体で、與へられた座蒲團を自分に敷きもせず、傍らの方に、真中から二つに折つて置ゐて、話をして居る。是は今村熊藏である。熊藏は今挨拶を終つて、一寸一服した處であつた。

「誠に其度も、濟まなむ譯です、だが何も私用に費つたのではない。才助の見積り損ひから、壹万圓斗りの工事を七千圓で請負た。是が仕方はなる、見積り損ひは請負人の失策だから、見積り損ひで損害が立つたから、金を増して呉れどか、又は故意に、工事を粗雑にするとか、爾んな考へが私には毛頭なる。又、才助の事を仰せられるが、彼には此金に關係がなる、右様の次第ですから、貴公の御都合で、何時でも着手致しますから、落成まで爲せて戴きたるのです。今茲で、八百圓さへ私の手元があれば、御渡しするのです。斯う云つては、御感情を害ふかも知れないが、私の方には今日迄に要れた金が太くて、是からは仕易いのです。然るに今此處で、不景氣だからと言つて中止は好ひが、工事の残つて居るに拘らず、今直ぐに渡し過ぎの金を返へせと、云はれるのは甚だ困るです。尤も才助が見積つ

て、負請ふたには違ひなるでも、金錢上には聊か關係のなること、其に彼を責めて、八百圓を返へせと、言ふことはできなるです。」と、自分に被つて、才助の行爲を掩ふはんとするのであつた。此工事は今村の名義で請負うたが、實際は井上才助の仕事で、今村が井上に、爾んな小ぼけた工事は断れ、自分の名に關かはる、殊に荒造りの成效ので、區切りを立て、何程仕事がなると云つても、爾んな莫迦氣た事をするより、遊んで居る方が優しだと言つたけれど、才助も自分の利慾の爲に、勧めたのではなる。矢張今村の爲を思つて、勧めたことであつたが、余り勧められたから、終に今村も、才助の言ふが儘に爲せた、爲せたのは可かつたが、見積損ひを才助がして、損の請負の上に、狡猾なる山口は物價の暴落と不景氣を見越して、幸ひ荒造で是を取上げ、他の請負師に、甘言で欺されることも知ら

す、何程でも廉う出来るよ云ふ、口車に乗つて、今村に渡し過の金を、返へせと言つて居るのであつた。

山口は、今村が言つたことを答めて、

「お前様が、八百圓の金は自分に、費ひ込んだのではなぬ。又、井上才助が金銭上には關係なる、と云つたら、誰に其金を請求するのです。貴公の名で井上に渡した金、貴公が井上に請取らず、其を井上は費つたのなら、彼れに罪がある。併し貴公が、井上より請取つてあるものなら、荒造までの契約通、渡した金の外、手の附けられんことは井上が、貴公の委任狀に依つて、作成せし契約證に證明してゐる、其費ふことのできなぬ金を、勝手に氣儘に費消して、今返へすことができんとは、云へない筈だ、」

「御尤もです。だが、工事の落成まで、契約は井上が、其麼なことをしてあ

らうとも、爲せて戴きたるでした。そうすれば誰彼が、其金を其麼したとか、斯うしたとか、争はずとも濟むこと、此邊で余り争はなぬやうに、御願を致したるのです。其とも、荒造以後のことは契約が契約だから、他に渡したと云はれて見れば、其迄のこと、暫く御猶豫を願へば、返金致しませから、」と、段々頼んだが、中々山口承知せん。

「然うすると、結局お前様が費消したのだ。契約に基つて、訓を起すから、ろう思つて、居て貰ひたる。其とも夫れが嫌なら、三日の中に、金を持つて来るが好む、」と、云はれても、今村は言語を低う、謙遜つて頼めば、段々附き上る、大体からすると、契約が井上は、如何なることをしてあらうとも、人間なら、這んな不人情なことが、言へもしやうまゐるが、出来もしやうまゐる、畢竟、此金も大半以上、荒造以後の工費に投れてある。自分

は井上に名を貸して、其上に與へた工事、又才助も自分に何んばか、利せしめる考へから、閑暇でもあるし、例のなむ契約までして、請負ふたもの其も這んな、不人情な奴と知つたなら、斯う云ふ請負は自分が止めた時、止めたのであらう、けれど契約は其麼してあつても、常識のある人間と見て、却て契約の如きに其處まで、念をいれんのは當然、亦這んなことを云ふ人間もなかつたが、時節が悪くなると、其麼な人間も出て来る、人智が年々確かに進んで、行くも、精神は年々悪くなつても、善む方にはならん。酷む奴も出て来るものと、思案して居た。是も一つの災難と斷然して。「其では仕方がなむ、黑白を法廷にて、決せんとなれば、罪の有無は別として、争ふの外かなむ。だか、山口様、人と云ふものは爾んなものではなからうと思ふです。何事も、人は法律々々と云つてゐたら、天下の人は半ば

罪人ともなるやうになりはすまむか。人が徳を捨てて悪くなる日には、畢竟体能く法律を潜つて行るか、下手に行つて、縛られるかの間があるまでだと私は思ふ。法律而已で杓子定木に、社會民人を制したなら、其れの裏を甘く切り抜ける者は、段々殖へて、終には益横着となつて始末におへぬ代物か殖へはすまいか。外國人は其邦の國風に從るが、我國には我國の人の道がある。三種の神器の如きもの、例は鏡の如く明かに、玉の如く融和して、若し迷ふことあれば、劍の如き利器により、裁斷も下さねばならぬ。併し、鏡も曇るときがある。人の道も其通り、明かにばかり行くものではない、鏡なるものは如何ほど曇るも、磨けば元の透徹したやうに見へることとなる。人と人との間の道にも、曇りの生じたときには、互に磨き合へば、玉の如く融和して、丸く何事も、大業にせずとも治まるもの。

然るに、飽迄も融和を欠き、争はんとなれば仕方がない、最後の劍によつて、裁断するの外はないが。三種の神器は不文律にして、人の道を示してある。失禮ながら、貴公も人道上争ふほどの事でもあるまゐ。余り慾心ばかりでは、御爲にはなるまゐ、」と、恚んな人間には我國體から説いて、頭を變へさすのは好いと思つたから、妙なところから人道論を説き起し、猶ほ、

「三種の神器は、天孫踐跡の時、是を傳へらる。人の道を即ち傳へ給ふのである。然るに、御互に争ふほどのことでもなることを、法律上の裁断を待たんとするが如きは、互に不利益は生じはすまゐるか、特と御熟考を煩はしたる。」

「爾んな説教見たやうな松苗(國史畧の著者)の論鋒に似たやうなことを言

つて居る時代と違ふ。高天ヶ原を飛行機が飛んでゐる。然う云ふ暢氣なことを云つて居るから、俺の金を横領するのだ、」と、口から出任かせに言ふと、間の襖が開いた。と思ふや否や、

「親分、御免、」と、今村に一禮して、矢庭に山口を蹴り倒し、

「此奴、天誅だ。覺悟せぬ、」と、云ふなり、山口の頭ども顔ども言はず、滅多打に、有合せの鉄の火箸で殴りつけた。殴られた山口は悲鳴を擧げ、血だらけになつた顔をしかめ、人を呼ばんとする時分には、今村は既う其者を取押へて、大に怒り、

「儂が、此處へ來ることを固く止めてあるにも拘らず、何故來た。殊に人を殴打するとは何事だ、」と、叱りつけたが中々訊かん、何うか親分許して下され此蓄生生かしては措かんと、口早やに言つて今村に押へられたのを

勿ね返へし、又山口を二つ三つ毆つた。何分太い火箸の頭で毆るのであるから、今村非常に心配して漸つこのこと取鎮め、一方山口に段々謝した。山口は、

「痛ろくくめに遇はしやがつた。」と、半泣きに泣いて居る。毆つた人間が井上才助で今村は圓満に解決せんと、山口と應對はして居るものゝ何分名義が彼れの請負工事に相違ないけれども、事實は才助が行つて、居たのであるから、若し自分に分らんことが、出来た時には尋て見ねばならぬ其が爲に才助を連れて来て、何事も耐忍して、決して粗暴なる振舞をすることはならん、尋ねたき事かあつたら、其時は呼ぶと云つて、次の間に、山口と合意の上俟たせてあつた。然るに、才助は今村に云る訊かされた通り、耐忍はして居たか、折々腕を拱んで居るのを解るては火箸を握り、片

膝立てゝは、立ち上りかけて居たところへ、余り山口は言語同断のことを云ふから、今村に對する己れの立場となる。こんな奴生かしてはおけんぞ赫として、此亂暴を働いたのであつた。今村は才助に向ひ、

「亂暴はならん。理屈は口で分かる。山口様は飽までも争はんとなれば、仕方がある、」と、山口の顔を眺めると、火箸の頭で、力を籠めて、毆られたのであるから、額は破れて血が出てゐる。所々腫れて、如何にも氣の毒など思つたから、更らに今村は、

「誠に、御氣の毒な事を致しました。私に面じて、何卒、御宥免下されたら。」と、謝するのを耳にも止めず、

「お前と云ふ人は、随分悪む人だ。人の道は何うだとか、斯うだとか、云つて居ながら、才助の亂暴者を随つて来て、俺を毆らせ脅迫して、八百圓の

金を滅茶々々にする積りだ。宜しむ、其なら其で俺にも考へがある、」今村は此時、金のことは事實を述べたら、自然に解けるが、山口に傷を與へたのは何處までも敗け、断るの外がなるといふものゝ、斯うなれば断はつたところで、其を許すやうな人ではなむ、一先歸つて、善後策を講じやうと決心し、山口に深く謝罪して歸らうとすると、山口は何と思つたのか、「三日の中には是非金をね、何事も金で濟むことだ、」と、已れの顔から頭を殴られ、血が出たり、腫れあがつてゐるのにもおかまゐなく、既う其事は忘れて三日目に金をと云つて居る、今村は好む加減に挨拶して歸つた。今村が歸つてから、才助の粗暴を戒め、且つ蒼蠅と思つて、金の工面にかゝつたところが、意の如く運ばず、壹日は二日と延び二日は三日となる中に山口より殴打創傷并びに横領の訴を提起して、才助は本犯、今村は幫助罪

として、拘禁となつた。其起訴の文には、今村と才助とが協力して、殴打せしものと書ゐてある。八百圓は契約に違反して、費消したものと云つてあるから、一應の取調を受けた。八百圓の金件は金件としたところで、殴打の場合飽迄も山口が、兩人協力して自分を殴り、此通りの傷を與へたと主張する。才助は懸命に事實を陳述したが、此間の立證は判然しなむ上に今村は三百圓斗を自分に費消したと云つた。井上が是を否認する。一向理由が解らん。検事も一寸困たが、止を得ず二人とも拘留状を發せられたのであつた。

今村の八百圓云々は素より、横領の意志ではなく、半ば以上は先きの工事を見越して投じ、残り三百圓程は井上に託し、其後の要途に出金する様にしてあつた。然るに井上の母が病氣や死亡の爲、其内の幾分を井上が費消

してあつたらしるが、山口が、一時工事は中止して居つても、早晚落成までは繼續して行るもの、行れば請取金は出来ても渡す金がないと思つて居たのは這んなことになつて、來たのである。又山口も常に井上に、落成までは必ず頼むと言つて居たから井上は今村に其通を言つて居た。故に今村では、充分信じて居たのに、全く山口から不意打を行られたのである。

今村熊藏と熊本監獄に玄吉は面會して後

お瀧を留守宅に訪ふ

熊本監獄未決囚面會所に木綿立縞の羽織に、同じ縞の單衣を着て紺の小倉帯を結び、麥藁帽を右の手に持ち、未決囚と話をして居る、四十二三の男が、玄吉であつて、又、看守は中間に直立して居る。右手に襟に番號を

記した、白布を縫着した衣類を着て。立て居るのは今村熊藏である。

玄吉は、

「親分、誠に飛でもない御災難、何とも申上様も御座りません、無ぞ、御窮窟で御座りませう。先般の御禮や、私が御庇護で大阪に参り、其有りし事情を申上たいと、存ますけれど、長々敷い話や、余計な御話をする事は規則として申上げて居られません。何か私の身に叶つた。御用が御座りましたら、遠慮なく仰付下されたい。少も厭は御座りません、」

「御心切は有難が、今以て何も頼む事は無い。又俺の今の身體となつたのは災難でもなければ、別に誰を恨と思ふ者もなぬ。窮窟とも思つては居らん。唯自分の思想が悪いと思つて居る。法律と情實とは別物、法律よりして免れん罪と確定するや、否やは今分らんが、仮りに有罪と確定せば斷然て居



る。假令何十年の服役宣告を請るとも、忝く御請して、柔順に處刑を充たす考で居る。俺は國家の法網を破つたものとされば、一時も早く適法の罪に服したいと、此處に來た時から思つて居る併し、」と、一聲高く叫んで、

「國家の法律を、犯たのは俺の罪として、之に服するか、法律もなければ、別に何等の形式もない隨て觸る事もない罪、即ち今日善良なる精神を殺して、食ほとする人間の繁殖を防ざる罪、」と、言頃は昂奮して、演説口調となつた。立會看守は、

「黙れ。此處は何處だと思つて居るか、」と、叱附た。今村は承知せん

「言論は國民自由に享有せし權利だ。自分は既決囚でない。畢竟疑の爲、今未決監に収容されて居る。だが、犯罪の確定した囚人ではない、」と、怒

鳴つたが、是は今村が無理、仮りに裁判確定の後無罪となるにせよ。薄弱なる疑の爲に拘留状を發して、人身を拘束するものでない。何等か恚るべき證據あつてこそ、豫審免訴ともならず、未決監に収容されたる者、殊に井上を救はんが爲にせよ。自白してゐる、此邊の事理を、立會看守は言柔かに訓戒したから、素より今村は事理を辨へぬ人間ではなく、自分の不心得を謝し、且訓戒に服膺して、面會時限も切迫したから、看守に引立られ、玄吉より、

「親分何卒身體に御障のない様に願います。」との一言を跡に遺れて、官房に送られた。官房に送られた今村と、監獄を去つた玄吉とは互に厚い涙の袂別であつた。玄吉は今村と監獄で分れてから、其足で今村の留守宅に、女房のお瀧を訪た。

お瀧は、玄吉と半期ばかり前に、遇た時とは夫の入獄や、何かで心配した  
ものか、眼が落込、頬の肉は削たやうに落、顔色青ざめて、一見人は變て  
居んのかと疑位、窶てゐる。お瀧は若い者等に、毎日夫の方への差入辨  
當とか、書籍衣類の入替へ、又は多數の知己や、熊藏に世話厄介になつた  
人々等の、訪問に對する應接やらで來る者く、何か夫れく持て來る。  
其を請ての後、一々奥の間へ、運せたりするだけの要事に忙殺されて居た。  
玄吉は表入口の庭の隅に立て、其様子を見て居たが、漸く、一寸人の引た  
隙を見斗ひ、

「私は、先般御邪申上しまして、御挨拶も申上ず、失禮致しまして、何共御  
断りの申上やうが御座りません。其座ぞ、御許しのほど願ひます。此度は  
御主人がごと、嚙ぞ御心配御察し申上ます。」と、挨拶した後、今村に面

會した事を語り、色々風呂敷包から物を出して、

「是は甚だ輕少な品で御座りますが、私の寸志まで御笑納を願ひます。」と  
差出した、お瀧は、

「何時ぞやちらと御目に掛つたやうにも思はれますが、相變ず、御壯健で、  
是は結構な御品御辞退申す筈ですが、有難く頂戴致します、其は遠路遙々と  
御丁寧に、宅のも此度は御耻しい事です。」

「實は私も驚きました、親分には何かの原因があるでしやう、誠に我勝手  
な事を申上しまして、濟ないですけれども、色々承りたい事もあります。  
一寸御若衆にでも、」と、頭を下げ、腰を下うして、手をもじくさし  
ながら、頼む。お瀧は、  
「秀太郎、」と、呼で、

「此方を、奥へ御案内申上、」秀太郎は玄吉を奥の間へ招じた。奥の間の床には諸方から送つて来た物、又は持て来た物が、皆見舞の品で山を爲してゐる。

秋とは云へ九月まだ暑い日もある奥の障子が明け放つてすやく入る涼しい風に、ほつと一息した玄吉、此春、此座敷で親分に恩義を蒙たのである。今は自分が這ふして涼い風に快が、親分は定て此暑日にと思と、心は變じて、もう暑とは思はなかつた。上熊本の停車場や、黄ばんだ早稻田の稻の、黄金を撒いたやうな美さに、見惚れて居たのも、其は見る氣にもならなんだ。秀太郎に向ひ、

「親分が、其座敷の爲の今度の御災難です。」

「私には委い事が分ません。だが、何でも請負爲さつた仕事先は、大牟田の

山口初之進様とか云人で、請負たのは半年も前の事、小さな工事だが請負たところ荒造となつた頃一時中止すると、山口の方から言て、中止してしまつた。其時親分の方に清算したならば八百圓程貫過に爲てゐた。金があつたらうだ。けれど請負は元七千圓で落成するのだから、荒作りの儘で中止したのは先方の勝手。當方から違約した譯でもなる。何れ、此先落成せねば成らぬもの、其當時は、双方とも故障なく、請取過になつてゐる金は落成の後、差引清算せば好むはぐらいの、粗とした話で済でゐた。所が籤から棒に、其金を返濟せいと行て来たのだ。そこで、井上君は事實の當人親分同道山口へ行つたのだが、訊かん。先方の告訴に依て、斯ふ言事になつたとの、譯です、」

「山口初之進で、へエー……實は私の娘を奉公させてある家です。娘の奉公

して居る先の主人を、悪く言のではありませんが、中々狡猾な男で、私も最初爾んな人間とは知りませず、五十圓の金に詰た時世話して呉れる人があつて、娘を行たのですが、私の娘は一寸戻つて、番頭とかに言つて居たと云ふのを訊きました。彼の人のやうに感情に薄ゐ、理性に勝つて既う一つ分らん人に限つて、随分無法を行るものです。だが、契約でもあつて其に反抗する契約とか、定つた丈の事は、爲てなかつたですか、」

「さあ、其處が疑問、契約の内容は知らんが、荒造迄は何程、落成迄は何程と、區劃をせいと請負ふ時、山口が言たふで、親分は断れと言たふだが、才助は まあ、閑暇な時だ。と、勸めたさうだ。其で親分もあ言暢氣な人、其ならお前が行れ、」と、云つて、其儘請負たらしい。其が今の縛の基となつたです。所で困て居るのは山口の家は其儘にはして

措かん、焼打して平げねばならんと、從來親分から世話に爲た人々が、喧敷云て居る。お妻女様の話には、儂が是から行つたら、其麼な命知らずが出んにも限らん。若い奴等に、克く説諭し警戒する様、お前から言ひ傳へよ。若し不穩の事でもあれば、其奴ら儂の家から、煽動した如に思はれては、氣耻いと言れたとの事、其で、焼打なんか言てゐる者等を、押への爲め、随分苦心もして居るです、」

「爾んな御心配もあるでしやうし、金の消へる事も夥い、萬々御察し申上ます。誠に御要の多い中を、御手間取致しまして、何共申譯はござりません。今日は是で、御暇を申上其中に是非一度御窺に出ます。御室様が相變らずの御人相手宜敷、」と、言放つて立たから、秀太郎も共に立て表の間迄行、立吉は、



があつて、酒宴でもあるらしく。勝手の方は忙しくして居るし奥の間には四方山の話と、君盃をと、鉄面皮催促して居る者もあれば、又一献進じると、鹿爪らしく言て居る者等で、手に取る如くに聞へる。時間の經つに連れ段々酔が廻つたものか、中には一つ言つて分る事を、五六度も繰返し同事ばかり言てゐる者や、傳への便所に行き、前の道具を目的地以外に横向せて、發射した結果、板の間を濡し、隨いて來た酌人に叱られ、是は降參と、自分手に自分の頭を叩ひて居る者やら座敷へ飯りがけ椽端に尻餅突て、笑つて居る者やらで、随分騒々しい、中にも岡村は大恐悦で、傍若無人の如く大氣焰を吐ひて、靜にして居る客を烟に捲て居る。曲者は更け行く空を眺めつゝ、嘆息して寢靜るのを俟つものか身運もせず此状態熟と聞て居た。

纏て、十二時前とも想ふ頃客が、弗々危ひ足元を運んで、玄關迄岡村に送られ、路舌も廻らぬ舌で、譯の分らぬ唄を歌ふて、酌女に手を引かれたり、肩に縋る如な真似をしたりして、門口迄見送られ、皆飯へて終つた。下僕の熊公が、爛冷しの酒を密々で大分飲つて酔ふてゐる。眼ぶたを半分ほど、長きかゝりた眼もとで、身体をよたくさせ、

「ア、く、今晚はるゝ一氣色、這んなことが度々あつて呉れんどごもならん。何時でもがんく吐かしゃがつて碌でもない、彼の爺奴と、尼奴、似た者夫婦で、なんでまが好んでしやう、」

「熊……早く門閉よ、」と、岡村が言つたのは遠ほ聲に聞へたので熊公も大きな聲を出して、

「へーへ、」と、云つて、喧し言ふない客つたれめと忖いて、

「金が慾しても奪りや縛られる、女欲しても來てがなる、なんで問が悪いんでしやう、」

「熊様、お前、何獨り喋舌つて居るの、」

「オツと、お鍋様好るところで遇わやしたのーがちやん、」

「熊様嫌だよ、演劇の眞似見たよなこととして、」熊公が、拇指と小指と、両手で一本づゝ出して、

「既う、寝たいらう。結構々々、こけこつこ、」

「最う熊様ほんとに嫌だよ、妻や寝られなむよ、早うお寢み。ね、熊様、」

「一寸俟つて、是から筒掃除、」

「筒掃除て何の筒を」此筒をと右の手で股のところを押へる。

「嫌な人、」と、お鍋は云つて、

「熊様、妻や、もう寝る、」と、家に入ゐる、熊公も眠むたそうな眼で、其處等まわりを見歩ゐて家に入つた。

此時曲者は身を戦慄し、最う氣が轉倒して居つて、正氣と云ものは更にない。其代りに實に／＼何とも解せぬ、凄いとも恐しいとも、鋭くなつたとも、例へ様のないような氣に充滿されて、血が皆昇つて足の痒も知らなんだ。

己れの身体か他人の身体かどさへ疑ふ位であつたが、幸ひ見つきりもせず漸く蘇生した思で我に飯り、太い／＼、溜息かとも遽に沸た息かとも、自分ながらに分らぬ、息を吐いたのである。

岡村の宅は急に引密として、皆寢附いた。曲者が己れは好しと、熟と諸方に眼を配り、草をも寢沈むと云、丑滿の頃、地駄々々と足音のせぬ様、密

つと、克く勝手を知てゐるものと見へ、裏口に廻り障子を、すふうと音のせぬやうに開けて臺所に上つて見ると、下女は客來の爲、朝から夜の遅がけまで、忙しかつたので疲れて、釣つて歩かれても知らぬくらいに、克く寝てゐる。是を見済して、平生主人が書類や、机には金も置事のある用室に忍込み。其處等を隈なく探したら、用單筒の曳出に、金庫へ來客の爲め多忙に紛れ、入忘たものと見へ、曲者の思つてゐたのより多額の金拾圓五圓交せくの札で百八拾參圓銀貨で、拾圓もあつたと想つたが、盗人は初陣と見へて、一時は慄とし、又一つは音がして見附りでもしたら大騒動と、札だけ百八拾圓奪い取り、天の與と戴て、握た儘、跡は白波雲霞と逃いで終つた。

翌朝、岡村の邸では爾んな事とは露知らず、主人は酔てグツスリ寝たし、

家内の者は皆疲れて寝て終つたので、男仕が起て、門を開けに行たら締りが取てあるので、大に驚き、此由主人初め家内の者に傳へたから、一時に騒立て、其處此處と調べて見たが、別に不足と云ふものがある、けれど只用單筒に入てあつた札だけ無ひ。岡村が妙なこともあるものと、不審に思つたの。盗人なら、銀貨で三十四圓あつたのも持て行く筈、然るに札だけ無いのは怪しいと疑ひ。是は必ず内々で出来たことかと、昨夜の客の中に其室で酔の倒れて、寝た者があつたので、紙を貼つたやうな眼と、猜疑心が深ふて、人を好ふ見透ん愚味には有勝ちのこと。飛んでもなるどころへ火が飛んだ。親友も縁者もあつたものでなる。他人の迷惑を慮かり耻辱を與へては氣の毒と、思ふやうな考へを持たぬ人足。前夜招いた客は悉く、自分の家の奉公人は無論のこと、嚴重に調べた。其結果、其客等は非



常に激怒つて、今後彼な奴とは交際を断つと宣告せられたやうな滑稽を演じたのであつたが、結局迷惑したのは家内の者と招かれた客。其後色々調べて見たけれど、内裏には爾んな者のあろふ筈がない。矢張外から入った賊と云だけの事は分たのであつたが、誰の處爲とも分らんじまゐ。其日から四五ヶ月経つと、今迄無病息災であつた丈平は急に口が曲がんで来て、流動物の外固結物は一さい、食することは不可能となつた。

玄吉再びお瀧に面會して五拾圓を渡し、  
歸途山口初之進を罵り、娘の金を拂ふ。

或る日の午前九時頃、玄吉は今村の宅で、お瀧と秀太郎の三人奥の間で互に話をして居る。玄吉は、

「此間御窺ひする時、親分に遠ほに頂戴、否る拜借した金が五十圓ありまして其を返済する積りで持て参る筈でした。ところが宿へ置忘て、實ははつと氣が附たのは、親分に御面會する前で其時直ぐに宿へ引返そふかと思つたなれど、確い宿であるから其迄に及ばぬと思ひ、其よりも先づ親分に御面會をと存じ、又御宅へも其事は何共申上ず、何れ金子持参の上、御返金と共に申上様と心得、此間御暇申上る節是非其内に御窺ひすると、申上ておいたやうな次第、何卒是を御請取下され、」と、十圓札で五枚出してお瀧秀太郎の前に置た。是を見たお瀧は呆れた面持で、

「此間は御土産や御見舞に預りまして、難有ふ御禮申上ます。宅のに面會の節傳へやうと思つて居つたです。併し貴公が宅のに貰たとか、借つたとか其は妾には初耳です。然んな事が何時あつたのか、妾には一向分らない。

分らない御金を、請取る事は出来ませんから、御持飯へり下ださるませ。」

「貴女には御承知がなくとも、私には承知致して居ります。承知致して居るごころではなぬ、其頂いた時の御恩は何時までも忘れませぬ。其嬉しかつた事は忘れてしまへど云れても、忘れることができません。其も親分に斯ふ云御災難さへなければ、或は今暫く頂戴した儘で居るかも知れないでしが、御恩を受たる私には、今の御難儀を、申上ては甚だ失禮ですけれども、他所に見る事は出来ません、誰が、此世智辛い時節に恩も縁もないものに、只金捨る者がありまじやうか、今日親分の御身の上御察申上ます。仮に恨ある奴殺し」と、言かけて早速引込み、

「又御不幸の上に御物入、御察致します、」言た言語が顛ふて、眼が濡み熟と

頭を垂れたまゝ嘆息した。是を見た、お瀧秀太郎も共に袖を絞たのであつた。秀太郎は漸く

「私には其様な親分と此方との間に、事情があるのか知らなさいですけれども、茲迄言ひなざる程の事。然ふ貴女の如に固い事を言はないで、親分の事だから爾んな事がいくらもあるでしやう。此間も現在あつたですもの。此方の心切は眞の赤心、兎も角御預りして置なされては如何です、」

「御金と云へば今は五圓十圓でさへ難、否え何んばあつても今は要る時、其では秀太郎の言通御預り致して置ます。若し宅のは之を聞て、然ふ云事はない戻せと言はれたら御戻することと致しましやう、御心切は忝く御請致します、」

「滅相もない。御預杯借つたお金を返済する迄の事、別に心切も何もないで

す。御心置なく御納を願ひます。實は私も兩三日中に大阪か、東京かに行  
く積なんですが、熟れに到着するとも、居所は定り次第手紙を差上、親分  
の御動靜を御窺致ます、」と、お瀧秀太郎の二人の外若い者等にも暇を  
告げ、今村の宅を出た。

戻道を廻た玄吉山口の店に腰を掛るなり店の者に、

「旦那に、一寸俺が来た事を取次で貰ひたい。」早速店の者は奥に入り山口

に此由を通じた。すると山口は、

「娘を戻迄に金借に來よつたんだ。是で親里へは中々行らんのだ、」と、呟

きながら、

「臺所へ入れと言へ、」と、取次に來た者に言ひ附け、奥から臺所へ立て來  
ると、取次の言通り玄吉も臺所へ入つて來た玄吉の顔を見るが早いか突然

に山口は、

「お前京とか大阪とかへ、出稼に行たそらだが、儲つたか、」

「何だ。儲かるが儲かるまいが、貴様の如な畜生に言要が何處にある、」

「偉い、今日は變つた勢だね、」

「是りや親爺、貴様好い加減に死らんと普通の往生が六ヶ敷ぞ。大概若い時  
分からして來た事が、胸に覺へあろふ。儂は貴様の家に貴様のやうな奴と  
は知らず、娘を奉公させてあつた。儂は何を言れても、はい〜と言て黙  
つてゐた、御金を借つた御主人と思つて、今日迄居つたが、儂でも人間だ  
魂がある。畜生でも殴りや憤る、何時までも頭ばかり押へられ、御尤〜  
と言つてゐると思つてると、貴様の家は誰も壊すものが無くて、自然に  
潰て終ふ。今に潰れる。是は貴様に引導授て置くのだ。娘の勘定せい、」

言はれて山口は失敗た。儂はおかづに口説て無理やり逃るやつを、こんな事が母親の外、知らん筈だつたが玄吉の耳に入つたとすれば、其こそ大事、柔順しい奴ではあるが今日の勢見ると、もう別人とより外思はれん困たなくと、一人氣を揉んで、此調子では金が無論彼奴にある筈はなし、四五十損たわいと心配して居つたのに、勘定せぬ。妙だな、矢張零にしやがるのか知らんと、爾んな事を考へて居るものだから、

「まあ好いくく、然う怒つたものでない、」

「莫迦。此奴何と云間抜けか、人が金拂ふと言ふのに、まあ好いくくして何だ、要らなければ持て販る、」山口の慾ん坊金拂ふと聞いて二度吃驚、

「エツ金拂ふて、直正だな、」

「貴様の如な奴でも、人間と言はれるのは金で面を守る者のある世中なれば

こそだ。貴様の顔は人間で面が出来てゐるのでなる。金で面が出来てゐるのだ。人間で面のできぬ奴は人間でない。腹切て死ね。腹の中まで金で出来ては居らんたらふ、」

「玄吉様然ふ大い聲で言はなくともね、店の者に聞へる、娘の勘定すると言ふのなら今直ぐする。」

「早くせい、」

「勘定は證文の通、一年半が五十圓の契約、そこで十ヶ月になるから、畧と殘金は二十三圓ばかり、其外小貸は小遣錢だの、湯卷着物の裏だとか、襦袢を買ふとか云て、貸たのを積ると十圓程ある。併し、是は給金を月割に差引ての事、證文からすりや一年半内に、お前の方から引取時には月割の何のと云事はない。元金五十圓と、別貸十圓と合して六十圓だが、其處は